

史 跡

上 之 国 館 跡 IX

—令和4年度洲崎館跡・勝山館跡発掘調査事業報告書—

2023・3

上ノ国町教育委員会



## 序

史跡上之国館跡（花沢館跡　勝山館跡　洲崎館跡）の三館は、約600年前の室町時代に北方日本海交易の拠点として重要な役割を担っていたことが知られ、今に受け継がれています。勝山館跡は、四半世紀以上に及ぶ発掘調査や整備事業により、北日本の中世史を書き換えるような極めて貴重な知見を得ることができました。

一方、近年では勝山館跡の整備箇所で経年劣化が生じ、本質的価値を伝えることに支障が生じておりました。そのため、日本国民にとってかけがえのない遺産である本史跡を、持続可能な取り組みによって保存活用する方針を示した『史跡上之国館跡（花沢館跡　勝山館跡）整備活用基本計画』を令和3年度に策定しております。

また、令和4年度は整備活用基本計画等を踏まえ、勝山館跡と洲崎館跡の発掘調査によって遺構の確認を行い、永続的な史跡の保存活用の取組みを推進しております。

末尾になりますが、事業推進にあたり文化庁、北海道教育委員会、史跡上之国館跡整備検討委員会の皆さまをはじめとする各関係機関の多くの方々には、多大なご協力を賜りましたことを衷心より感謝申し上げるところであり、今後におきましてもより一層のご教導をお願い申し上げます。

令和5年3月

北海道上ノ国町教育委員会教育長　矢代智樹



## 例　言

1. 本書は史跡上之国館跡のうち洲崎館跡、勝山館跡の町内遺跡発掘調査等事業に伴う令和4年度の遺構確認調査の報告書である。
2. 洲崎館跡は、北海道檜山郡上ノ国町字北村に位置し、遺跡番号が C-02-25 である。勝山館跡は、北海道檜山郡上ノ国町字勝山に位置し、遺跡番号が C-02-03 である。
3. 発掘調査及び整理・報告書作成の経費は、文化庁の国庫補助金、上ノ国町で負担した。
4. 本書の編集・執筆は塚田、佐藤が行なった。遺構・遺物の実測図及び図版等の作成は、各作業員が分担して行なった。
5. 本書に掲載した写真の撮影は、塚田が行なった。写真の撮影は、デジタル一眼レフカメラを使用した。
6. 発掘調査成果の一部は、現地見学会、発掘調査報告書等において公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合は、正式報告として刊行する本書の内容が優先する。
7. 採図の縮尺は、各図にスケールを付して示した。写真の縮尺は不統一である。
8. 遺物の点数については、現場での取り上げ点数を表す。
9. 過年度調査の遺構の表記は、その遺構が検出された調査年度を遺構番号の前に付し、'98 土壌4、'07 壓穴1のように表記した。
10. 土層の色調観察には、「新版標準土色帳」(農林水産技術会議事務局 1993) を使用した。
11. 土器・陶磁器の分類は、以下に基づいて行なった。  
青磁—横田・森田編年・上田編年(上田 1982)をもとに作成された国立歴史民俗博物館の分類表記(国立歴史民俗博物館 1994)、白磁—森田編年(森田 1982)、染付一小野編年(小野 1982)、漳州窯系染付—山川編年 (1994)、瀬戸・美濃—藤澤編年(藤澤 2002)、珠洲—吉岡編年(吉岡 1994)、越前—朝倉氏遺跡資料館報告書の分類表記(朝倉氏遺跡資料館 1983)、肥前系陶磁器—大橋編年(九州近世陶磁学会 2000)、縄文土器—北海道埋蔵文化財センター報告書の分類表記、(北海道埋蔵文化財センター 2006)
12. 出土遺物、調査写真・図面等は、上ノ国町教育委員会で管理・保管している。
13. 調査ならびに本書の作成にあたり、次の関係機関と各位からご指導、ご助言を頂戴した。  
記して感謝申し上げたい (敬称略)。  
文化庁第二課 近江俊秀 長直信 芝康次郎 大澤正吾 文化庁文化資源活用課 岩井浩介 北海道教育庁文化財・博物館課 宗像公司 内田和典 檜山教育局 佐藤春菜

## 引用参考文献

- 青森県史編さん考古部会 2003『青森県史 資料編 考古4』中世・近世  
朝倉氏遺跡資料館 1983『県道鰐江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』  
網野善彦・石井進編 2001「上之国勝山館跡と夷王山墳墓群から見えるもの」『北から見直す日本史』  
大和書房  
石井 進 2002「中世のかたち」『日本の中世1』中央公論新社  
上田秀夫 1982「14~16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』第2号  
宇野隆夫 1992「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告書』第40集  
小野正敏 1982「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』第2号  
上ノ国町教育委員会 1980~2005『史跡上之国勝山館跡I~XXVI』2006・2007『史跡上之国館跡整備事業報告書I~II』  
上ノ国町教育委員会 2001~2002『町内遺跡発掘調査事業報告書IV~V』  
上ノ国町教育委員会 2008~2011『史跡上之国館跡I~IV』  
上ノ国町教育委員会 2011『国指定史跡上之国館跡 花沢館跡 洲崎館跡 勝山館跡 保存管理計画』  
国立歴史民俗博物館 1994『日本出土の貿易陶磁東日本編1』国立歴史民俗博物館調査報告書V  
塚田直哉 2015「北海道上ノ国町洲崎館跡出土の中世陶磁器」『貿易陶磁研究』35、  
永井久美男 1998『近世の出土銭II一分類図版篇一』兵庫埋蔵銭調査会  
永井久美男 2002『新版 中世出土銭の分類図版』兵庫埋蔵銭調査会  
藤澤良祐 2002「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第10輯  
北海道庁 1916『北海道史』  
北海道庁 1969「新羅之記録」『新北海道史』第七卷 史料一  
北海道埋蔵文化財センター 2006「I. 4 (5) 土器の分類」『森町森川3遺跡(2)』第234集  
松崎岩穂 1956『上ノ国村史』 上ノ国村  
松崎岩穂 1962『続上ノ国村史』 上ノ国村  
松崎水穂 百々幸雄 中村公宣 1981「北海道洲崎館発見の中世遺物と頭骨」『考古学雑誌』第67巻第2号  
森田 勉 1982「14~16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』第2号  
山川 均 1994「漳州窯系陶磁器に関する編年的研究」『大和郡山市文化財年報・紀要I』  
吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館

## 目 次

序／例言／引用参考文献

本文目次／挿図目次／表目次／写真目次

I 史跡上之国館跡の概要	1
1. 史跡上之国館跡	1
II 遺構確認調査	8
1. 調査に至る経緯	8
2. 調査位置	9
3. 調査方法	9
4. 調査体制	10
5. 調査経過	10
6. 基本層序	11
7. 洲崎館跡の遺構確認調査	12
8. 洲崎館跡の出土遺物	16
9. 勝山館跡の遺構確認調査	21
10. 勝山館跡の出土遺物	28
III まとめ	29

### 挿図目次

第1図 道南十二館 位置図	1
第2図 史跡上之国館跡及び国・道指定文化財 位置図	
第3図 史跡上之国館跡 位置図	3
第4図 上之国館跡及び周辺遺跡 位置図	4
第5図 洲崎館跡 現況地形図・調査区位置図	5
第6図 勝山館跡 現況地形図・調査区位置図	6
第7図 安藤(東)氏・蠣崎氏 略系図	7
第8図 第1調査区 平面図・セクション図・遺物分 布図	14
第9図 第2調査区 平面図・セクション図・遺物分 布図	15

第10図 出土遺物(青磁・肥前系磁器・瓦)	18
第11図 出土遺物(瓦・銅錢)	19
第12図 出土遺物(銅錢)	20
第13図 鶴の池・第1調査区 遺構平面図・遺物分 布図	23
第14図 第1調査区 セクション図	25
第15図 第2調査区 遺構平面図・セクション図・遺 物分布図	26
第16図 出土遺物(陶磁器・鉄製品・縄文土器・石器)	28

### 表目次

表1 史跡上之国館跡消長表	2
表2 第1調査区 南北東壁セクション 土層観察 表(A～A')	13
表3 第2調査区 南北西壁セクション 土層観察 表(A～A')	13
表4 洲崎館跡 出土遺物集計表	17
表5 洲崎館跡 出土銭貨集計表	17
表6 洲崎館跡 出土遺物観察表	17
表7 第1-1調査区 南北西壁セクション 土層觀 察表(A～A')	25
表8 第1-2調査区 南北東壁セクション 土層觀 察表(B～B')	25
表9 第1-3調査区 南北西壁セクション 土層觀 察表(C～C')	25
表10 第2調査区 東西北壁セクション 土層観察 表(A～A')	25
表11 第2調査区 土壙1セクション 土層観察表 (B～B')	25
表12 勝山館跡 出土遺物集計表	27
表13 勝山館跡 出土遺物観察表	27
表14 安永年間以降における砂館神社のおもな造 営記録	29

## 写真目次

PL.1	洲崎館跡 遺構確認調査1(第1調査区)…	31
PL.2	洲崎館跡 遺構確認調査1(第1調査区)…	32
PL.3	洲崎館跡 遺構確認調査1(第2調査区)…	33
PL.4	洲崎館跡 遺構確認調査1(第2調査区)…	34
PL.5	勝山館跡 遺構確認調査2(第1調査区)…	35
PL.6	勝山館跡 遺構確認調査2(第1調査区)…	36
PL.7	勝山館跡 遺構確認調査2(第1調査区)…	37
PL.8	勝山館跡 遺構確認調査2(第1調査区)…	38
PL.9	勝山館跡 遺構確認調査2(第2調査区)…	39
PL.10	勝山館跡 遺構確認調査2(第2調査区)…	40
PL.11	洲崎館跡 遺物写真…	41
PL.12	洲崎館跡 遺物写真…	42
PL.13	洲崎館跡 遺物写真…	43
PL.14	勝山館跡 遺物写真…	44
PL.15	勝山館跡 遺物写真…	45
PL.16	勝山館跡 遺物写真…	46

## I 史跡上之国館跡の概要

上ノ国町は、北海道南西部の渡島半島日本海側の檜山地方に所在する（第2図）。町の面積は 547.71 km<sup>2</sup>で、そのうち約 92%がブナ、ヒノキ、スギ、トドマツなどの山林に占められている。集落は、二級河川である天の川河口周辺の沖積平野に位置する上ノ国地区（「中央」）と日本海に面した長さ 30 kmに及ぶ急な段丘崖が迫る海岸線沿いに営まれている。主な交通路は、海岸線を走る国道 228 号と山間部を通る道道 5 号江差木古内線で、南は松前町・福島町、東は知内町・木古内町、北は厚沢部町・江差町に接し、西は日本海に面する。檜山地方の地名は、「檜(ひ)」が「ひのき」を表し、かつてこの地域一帯にヒノキアスナロが生い茂っていたことに由来する。

町名は、15世紀頃に北海道の日本海側を上ノ国(かみのくに)、太平洋側を下ノ国(しものくに)と称し、勝山館によって日本海・北方交易の拠点として栄えたこの地に上ノ国の名前が残ったとされる。近年では、阿吽寺（松前町）の住職の記録『松前年代記』で勝山館跡の周辺を「神ノ国」と記述し、「神」がアイヌ語の「カムイ (kamuy)」という意味であることからアイヌと和人が信仰する聖なる山（=夷王山）の麓の土地として、「かみのくに」の名称がアイヌ語に由来する可能性も指摘されている（若松 2018）。

町内には、史跡上之国館跡を始めとする中世以降の和人やアイヌに関わる文化財が点在し、近世の建造物である上國寺本堂（重要文化財）、旧笛浪家住宅（重要文化財）、上ノ國八幡宮本殿（道指定文化財）が所在するなど、北海道内でも古い文化財が多い地域となっている。

### 1. 史跡上之国館跡（第3図）

史跡上之国館跡は、三館のうち花沢館跡が蠣崎季繁によって最初に築かれている。その後、武田信広が洲崎館跡、勝山館跡を築城している。

正保 3（1646）年に淨書した松前家の歴史書『新羅之記録』によれば、蠣崎季繁が若狭国の出身、武田信広も若狭武田氏の出自とする。

一方、近年では文献史学の研究によって、蠣崎季繁が下北半島にある蠣崎湊（むつ市川内町）の豪族であることが想定され、武田信広も同じく蠣崎出身で季繁を追って上ノ国へ来たことが指摘されている（石井 2002）。

また、『新羅之記録』の長禄元

（1457）年の記述では、今の函館市から上ノ国町を結ぶ海岸近くに十二の中世城館が点在したことが記述される。

現在、その所在を確認できるのは志苔館（函館市）、茂別館（北斗市）、穩内館（福島町、昭和 48（1973）年に工事で大半が消滅）、大館（松前町）、比石館（上ノ国町）、花沢館（上ノ国町）の 6 つである。

これらは「道南十二館」と呼ばれ、その館主が安藤氏の通字である「季」を冠する者が多く、本州から渡來した下国安藤氏関連の「和人」とされている。

下国安藤氏は、十三湊遺跡（青森県五所川原市）を拠点として日本海交易を一手に担うとともに、夷



第1図 道南十二館 位置図

島への流刑者管理に従事していたが、永享4（1432）年に南部氏の攻撃を受け夷島に退去する。一時は室町幕府の仲裁で十三湊に復帰したものの、嘉吉3（1443）年、南部氏によって小泊の柴崎城から再び夷島へ敗走している（『満済准后日記』『新羅之記録』）。

その後、『新羅之記録』の康正2（1456）年の記事から茂別館周辺に居たと思われる安藤師季（後の政季）が秋田に拠点を持つ湊安東氏の要請で小鹿島（男鹿半島）に渡海する際、「松前」（大館館主安藤定季）、「上之国」（花沢館館主蠣崎季繁）、「下之国」（茂別館館主安藤家政）に守護を置いたとされ、これがいわゆる「松前」「上之国」「下之国」の「三守護体制」と呼ばれてきた（第1図）。

また、近年では「三守護体制」に対して、「松前」の安藤定季を頂点とする「一守護体制」が提唱されている。

安藤定季の出自は、『新羅之記録』で不明とされていたが、阿吽寺（松前町）住職が残した『松前年代記』（寛文年間）から、下国安藤氏惣領家の家督継承権を持つ康季の二男であったことがわかる。そのため、「上之国」の蠣崎季繁が下北半島の蠣崎湊を拠点とする豪族、「下之国」の安藤家政が下国安藤氏傍系の潮潟家出身であることを考えると、道南十二館の和人社会は惣領家である「松前」の安藤定季を頂点とする「一守護体制」であったと思われる。

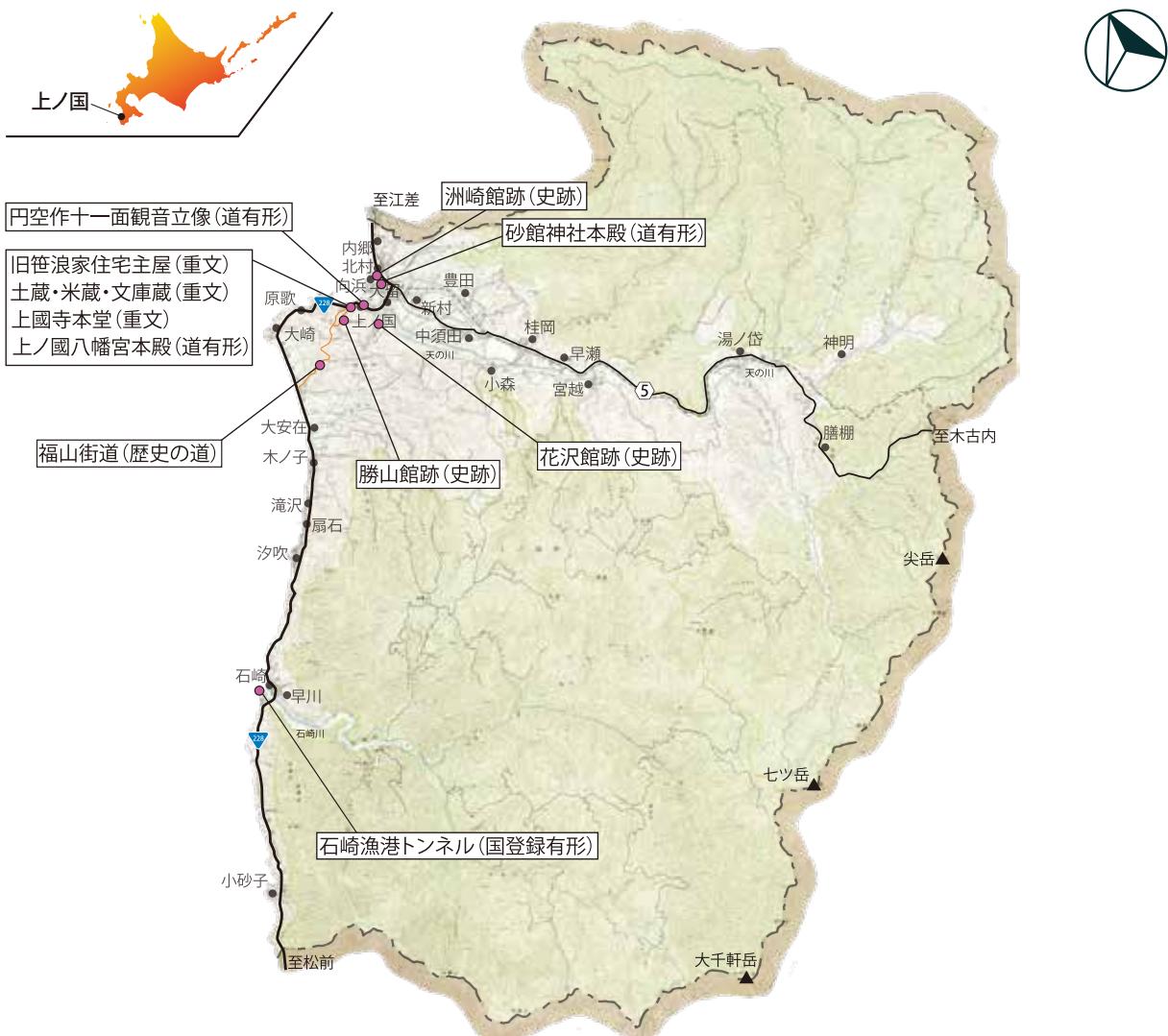
そして、「道南十二館」は康正2（1456）年の和人の鍛冶職人がアイヌの青年を刺殺した事件の翌年に起こった「コシャマインの戦い」とされるアイヌのリーダーコシャマインの進撃によって「上之国」の花沢館跡、「下之国」の茂別館跡を残して10館が陥落したという。武田信広はこの争いを収束させることに成功し、功績が認められ蠣崎家の娘婿として家督を継ぎ、同年に洲崎館跡を天の川北岸に築いている。

さらに、信広は洲崎館跡成立から10数年経過した1470年頃、天の川南岸に勝山館跡を築き、北方日本海交易の拠点としている。永正11（1514）年、家督を継いだ2代光広は松前の大館へと本拠を移し、勝山館跡に城代を置き、大館（本城）と勝山館跡（支城）の2館体制で夷島を統治する（表1）。

慶長4（1599）年には、5代慶広が姓を「蠣崎」から「松前」に改め、同9（1604）年に慶広が徳川家康より黒印状を賜り、松前藩が成立する。勝山館跡は、終末年代を示す志野焼（大窯4）や唐津焼（胎土目段階）の出土から16世紀末～17世紀初頭を下限としている。

表1 史跡上之国館跡消長表

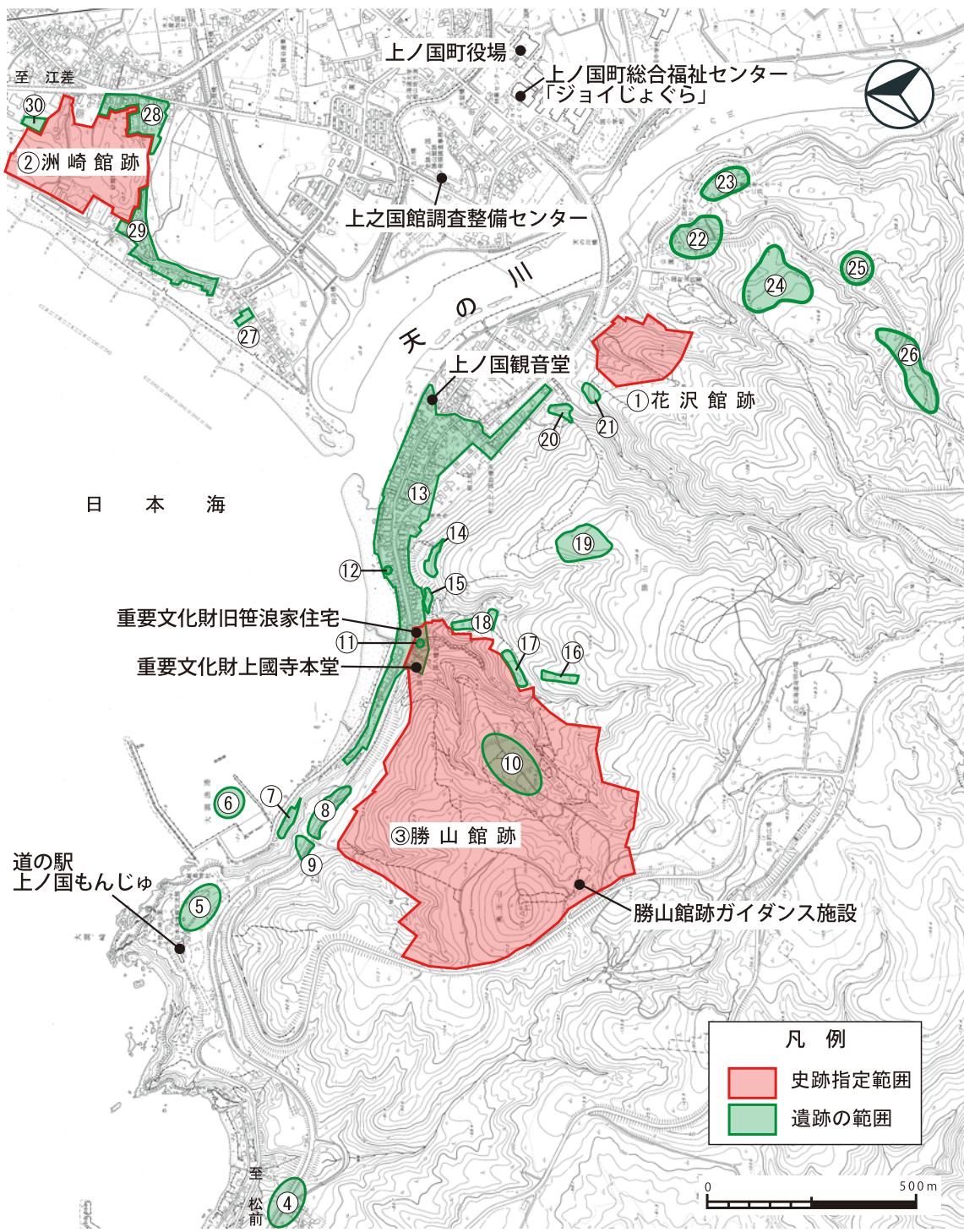
時代区分	鎌倉	室町			安土桃山	江戸
年 代	1 3 0 0	1 4 0 0	1 5 0 0	1 6 0 0		
花沢館跡 (蠣崎季繁)			(1432～1462年頃)			
洲崎館跡 (武田信広)		(館築城以前の集落)	(1457～1500年初頭)			
勝山館跡 (武田信広)				(1470～1600年頃)		



第2図 史跡上之国館跡及び国・道指定文化財 位置図



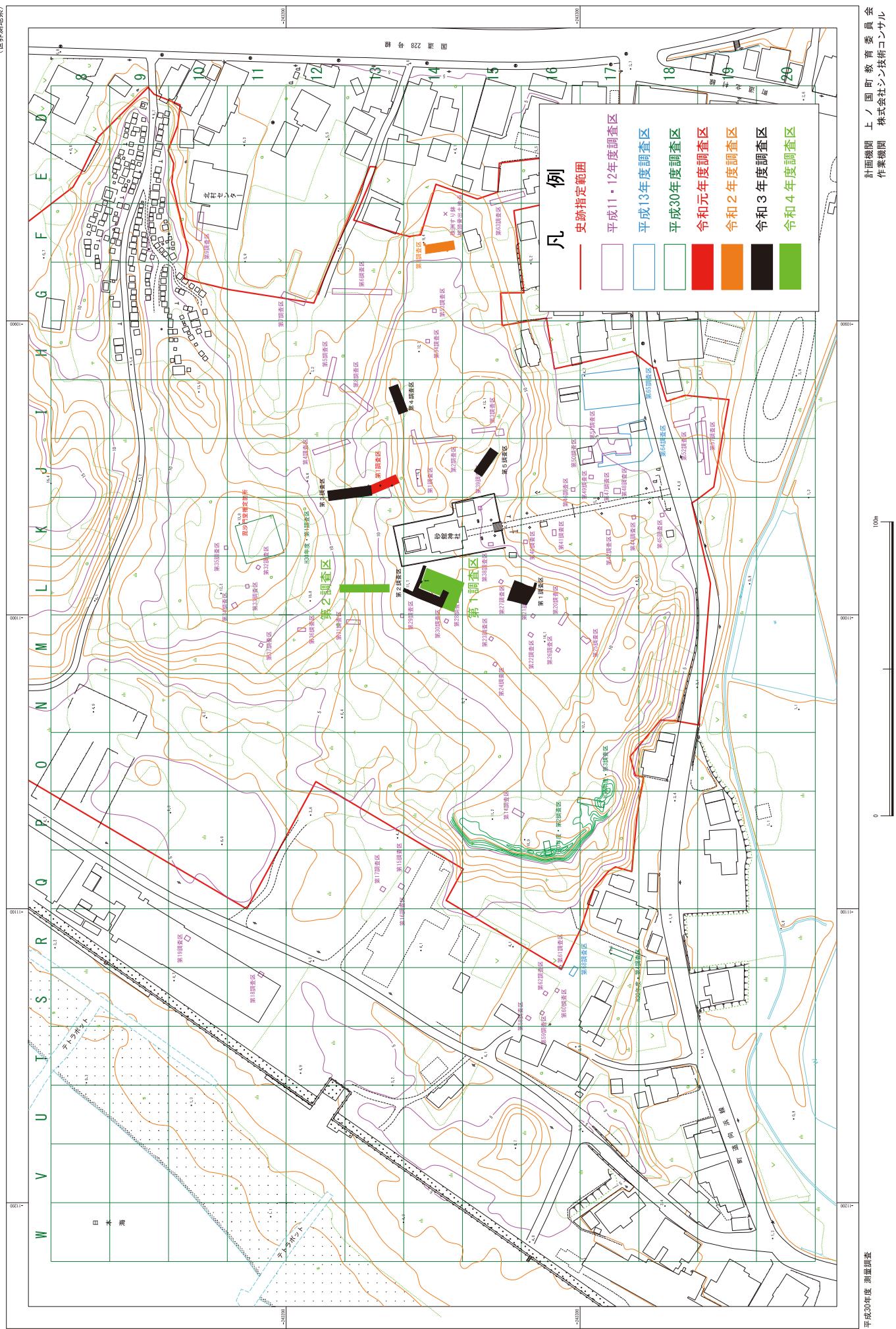
第3図 史跡上之国館跡位置図



No	名 称	時 代
①	花沢館跡	館の年代；室町（1432～1460年頃）
②	洲崎館跡	擦文、鎌倉、 館の年代；室町（1457～1500年初頭）
③	勝山館跡	擦文、 館の年代；室町（1470～1600年頃）

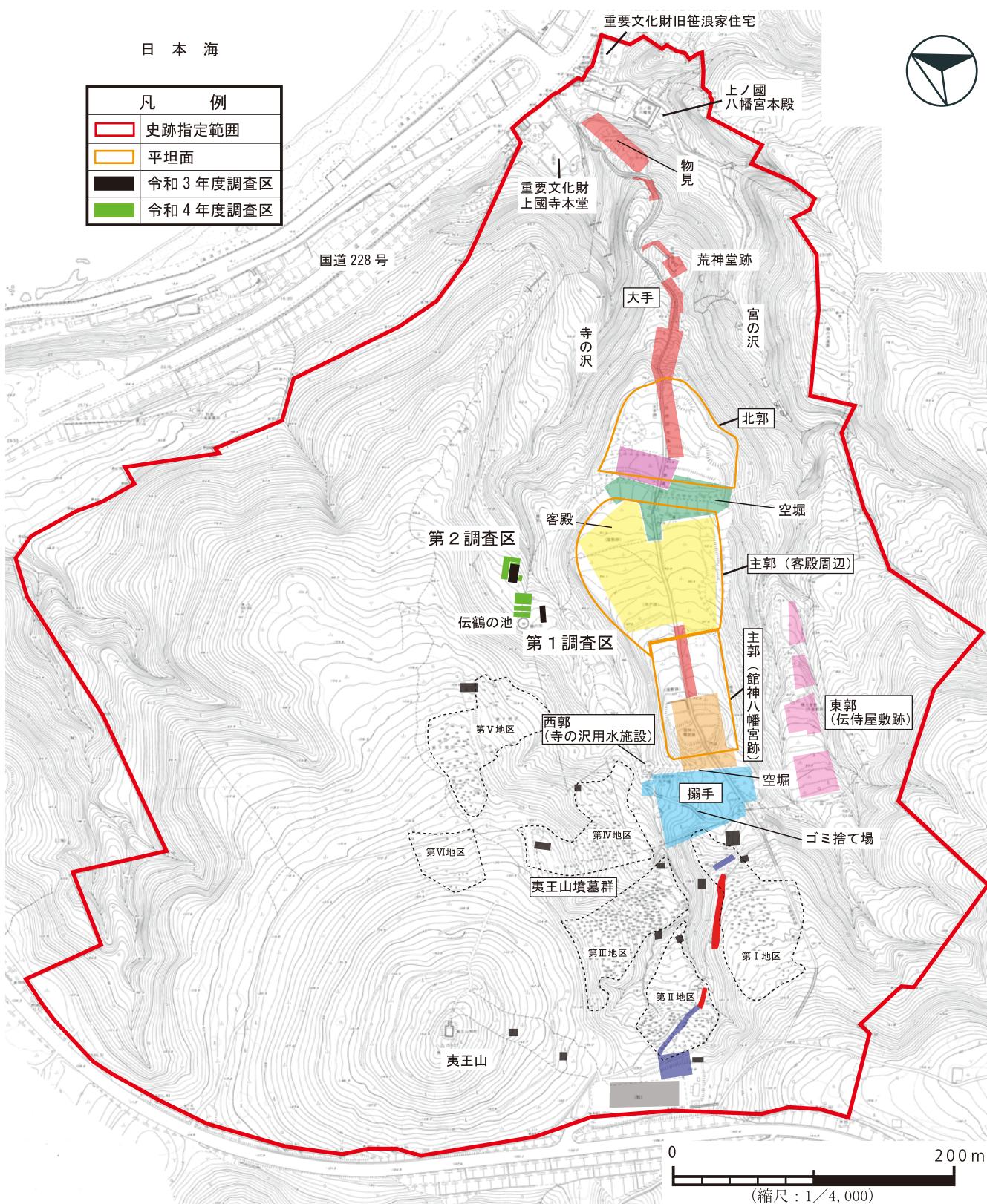
No.	名 称	時 代	No.	名 称	時 代
④	原歌遺跡	縄文早期～晚期・前期・後期主体	⑯	ほど長根 B 遺跡	縄文・統繩文
⑤	大洞遺跡	縄文早期	⑯	部落昌遺跡	縄文
⑥	上ノ国漁港遺跡	室町、江戸、江戸主体	㉖	お浪沢 A 遺跡	縄文晚期・統繩文
⑦	大洞下遺跡	擦文	㉖	お浪沢 B 遺跡	縄文中期～後期
⑧	四十九里沢 A 遺跡	旧石器、縄文早期～晚期・擦文	㉗	大岱遺跡	縄文中期後半～後期初頭
⑨	四十九里沢 B 遺跡	縄文中期末～後期前葉	㉘	大岱 B 遺跡	縄文後期
⑩	勝山館遺跡	縄文前期後半～中期前半	㉙	小岱遺跡	縄文中期～後期
⑪	宮の沢遺跡	縄文晚期・統繩文	㉚	大岱沢 A 遺跡	縄文中期後半～後期前半
⑫	上ノ国遺跡	縄文晚期・擦文・鎌倉	㉛	大岱沢 B 遺跡	縄文
⑬	上ノ国市街地遺跡	縄文前期～晚期（中期末～晚期主体）、統繩文、 擦文、室町、江戸	㉕	向浜 A 遺跡	江戸
⑭	市街地後方 A 遺跡	縄文	㉖	洲崎 A 遺跡	擦文、室町、江戸
⑮	市街地後方 B 遺跡	室町	㉗	洲崎 B 遺跡	室町、江戸
⑯	ほど長根 A 遺跡	縄文後期・江戸	㉘	洲崎 C 遺跡	縄文後期・統繩文、江戸
⑰	榎ノ沢遺跡	縄文中期～後期・擦文	㉙	北村遺跡	縄文中期～後期・中期前半主体

第4図 史跡上之国館跡及び周辺遺跡 位置図



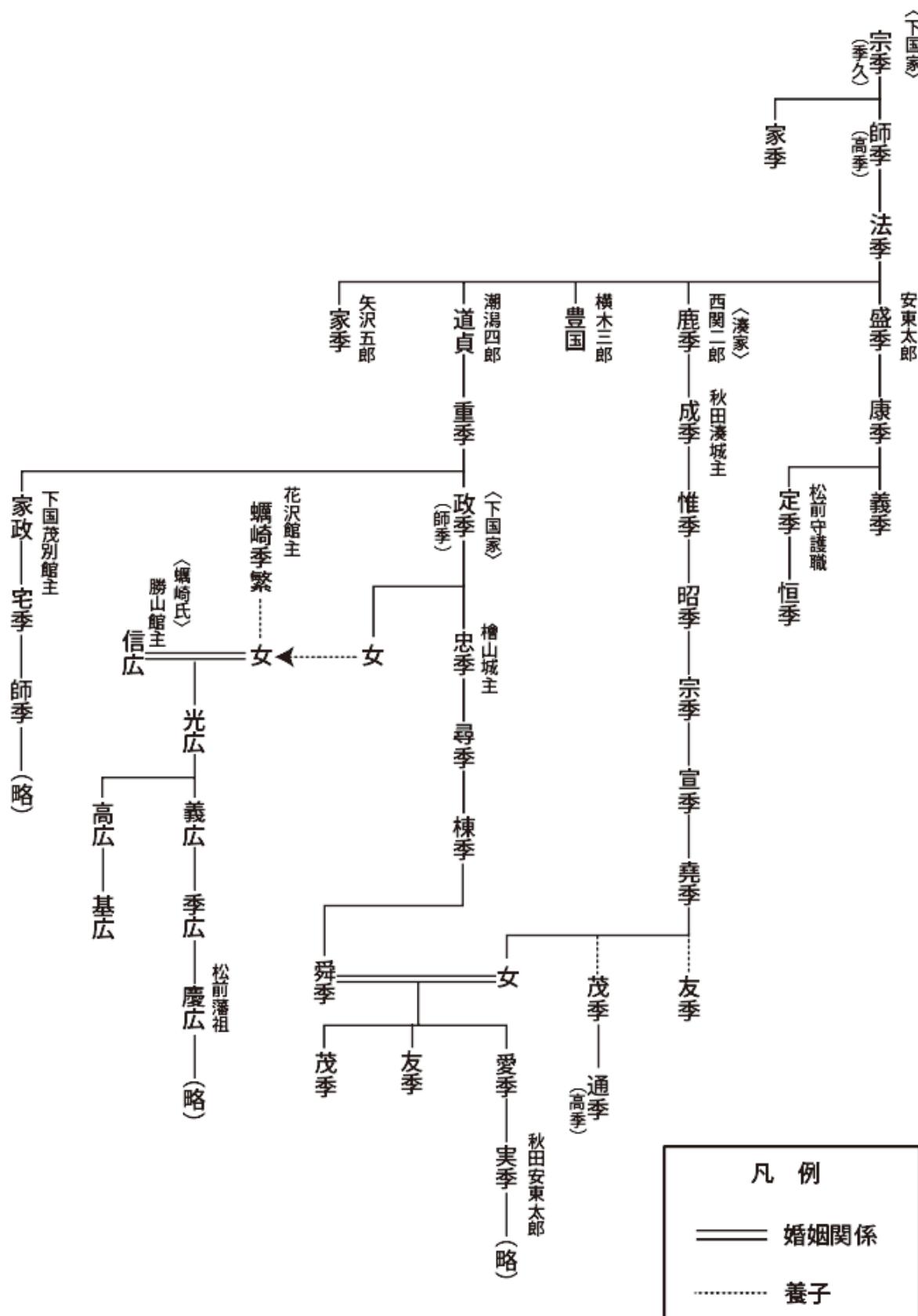
第5図 洲崎館跡 現況地形図・調査区位置図





区分	年 度	調査 内 容	面積 (m <sup>2</sup> )	区分	年 度	調査 内 容	面積 (m <sup>2</sup> )
■	昭和 54 ~ 58 年度	搦め手地区調査	4,389	■	平成 2 ~ 9 年度	主要平坦部 (第二平坦面調査)	8,970
■	昭和 56 ~ 58 年度	夷王山墳墓群調査	216	■	平成 10 年度	第一平坦面南西部調査	800
■	昭和 57 ~ 58 年度	館神八幡宮跡及び周辺調査	2,520	■	平成 11 ~ 12 年度	夷王山墳墓群第Ⅰ・Ⅱ地区調査	1,205
■	昭和 59 ~ 62 年度	伝侍屋敷跡調査	2,250	■	平成 13・15・19・20 ~ 22 年度	旧道跡、荒神堂跡、物見跡調査	3,236
■	昭和 62 ~ 平成 2 年度	大手地区調査	3,640	■	平成 14 年 ~ 16 年度	夷王山墳墓群第Ⅰ・Ⅱ地区調査	1,090
■	平成元年度	夷王山墳墓群第Ⅱ地区調査	1,000				

第6図 勝山館跡 現況地形図・調査区位置図



第7図 安藤（東）氏・蠣崎氏 略系図

## II 遺構確認調査

### 1. 調査に至る経緯

勝山館跡と花沢館跡の整備は、昭和 52（1977）年に策定された『史跡上之国勝山館跡・花沢館跡保存管理計画書』の「史跡勝山・花沢両館を含む史跡地域整備構想」に沿って遺跡の実態を究明し、「中世史跡公園」としての保存活用を理念とする。

昭和 54（1979）年には、地域の人たちが最も親しみを感じている山城という理由で、勝山館跡から整備事業がスタートしている。勝山館跡の整備は大きく 3 期に分けて実施され、第 1 期整備（昭和 54～平成 2 年度）で館神八幡宮跡・寺の沢用水施設などの揚手周辺の遺構の平面表示や復元をしている。

第 2 期整備（平成 3～11 年度）は、主郭の発掘調査で数度にわたる建物遺構の建替えや多種多様な遺物が出土したため、遺構確認調査を優先して行っている。それらの成果を踏まえ、「山城という防衛的な構造を持ちながら生活の場として使用された中世館の整備」を基本方針とした「史跡勝山館跡等整備基本計画」を平成 11（1999）年度に策定している。

第 3 期整備（平成 12～22 年度）は、平成 11 年度に策定した整備基本計画に沿って主郭で建物の平面表示及び説明板、柵・橋・通路・側溝などの復元整備を行う他、勝山館跡の散策ルートの始点と終点に、ガイダンス施設として上り口に旧篠浪家住宅附属米蔵・文庫蔵（平成 30 年 12 月 25 日重文追加指定）を復原し、下り口に勝山館跡ガイダンス施設を建設している。

平成 18（2006）年の三館統合後は、三館の適切な保存管理の方策を明確にした『史跡上之国館跡保存管理計画』（以下、「保存管理計画」）を平成 23（2011）年に策定している。

その後、三館で関連付けた保存活用を推進するに従い、これまで把握が十分でなかった史跡の周辺に点在する未指定文化財や自然・景観分野との融合を図る必要性があったため、地域住民と行政が連携して文化財の総合調査を実施し、平成 30（2018）年に『上ノ国町歴史文化基本構想』（以下、「歴文構想」）を策定し、史跡内外の指定・未指定文化財に加え、自然環境の把握に努めている。

しかしながら、歴文構想では、関連文化財群として史跡上之国館跡を核とした活用を検討していたが、勝山館跡の整備箇所で棄損がみられることや花沢館跡及び洲崎館跡が未整備であったため、史跡の本質的価値をわかりやすく伝えることに困難が生じていた。

そのため、前述した過年度の整備事業の課題を受け、保存管理計画（平成 23 年策定）が現在においても三館の保存管理及び整備活用の方針に大きな変更がないことから、これに基づいて今後の史跡整備の指針とすべく「史跡上之国館跡（花沢館跡 勝山館跡）整備活用基本計画」を令和 3（2021）年度に策定している。

今年度発掘調査を実施する鶴の池は、時期不明の遺構で壁面を礫で囲われている。その鶴の池周辺では沢状の窪みが確認され、その沢沿いの表土に礫が点在していた。沢状の窪みは、寺の沢に延びており、鶴の池の排水を担っていたことが推測された。今年度は、鶴の池に先行して沢状の窪みにトレーナーを設定して発掘調査を行っている。

### （1）洲崎館跡

洲崎館跡は、日本海に注ぐ天の川河口から約 800m 北東方向に位置し、砂館神社の南～南東側の標高 1～7m の平坦地と砂館神社の南西側、東側、北側の海成段丘面を被覆する標高 11～15m の砂丘に所在する。

洲崎館跡周辺のボーリング調査の結果では、中世の段階で砂州の内側に本流から取り残された水深約 1m、幅 35～45m の支流が明らかとなっており、当該域が十三湊遺跡（青森県五所川原市）同様、砂州を防波堤にした外海の影響を受けない川湊であった景観がイメージされている（上ノ国町教委 2011）。

平成 11～13（1999～2001）年に実施された発掘調査では、砂館神社参道東側の第 50・64 調査区を中心の中世の掘立柱建物跡、竪穴建物跡、土壙、柵などの遺構がみつかっている。その周辺の標高 1～7m の地点では中世の集落や港湾施設が想定される一方、空堀・土塁など城館に関連する遺構が検出されておらず、洲崎館の構造について不明な部分が多い現状にある（上ノ国町 2001・2002）。

そのため、平成 21（2009）年には現地踏査にて縦張調査を行い、土塁・空堀・郭・集落などの場所を想定した上で平成 30 年度から遺構確認を目的とした発掘調査を実施している。

## （2）勝山館跡

勝山館跡は、天の川河口左岸の丘陵に立地し、花沢館跡、洲崎館跡に後出して松前氏の祖武田信広が、勝山館に館神八幡宮を創祀した文明 5（1473）年頃に築城し、16 世紀末～17 世紀初頭まで存続した山城である。

昭和 52（1977）年に国の史跡に指定された勝山館跡は、昭和 54（1979）年から平成 22 年まで史跡整備事業の一環として、発掘調査が継続的に行われている。発掘調査では、建物跡の遺構や中国・朝鮮・本州産の陶磁器の他、金属製品、石製品、土製品、アイヌが使用した骨角器など約 10 万点を超える遺物が出土している。

さらに、館の背後に位置する夷王山墳墓群では、マウンド状に盛土された 600 基以上の墳墓が点在し、平成 11（2000）年の発掘調査で和人とアイヌの墓が確認されている。

平成 18（2007）年 3 月には、洲崎館跡が国の史跡に指定され、それに伴い勝山館跡、花沢館跡の天ノ川周辺に分布する国指定史跡の 3 館を合わせて、「史跡上之国館跡」と名称されている。

平成 20 年には、勝山館跡の出土遺物のうち 921 点が和人とアイヌ文化の関わりを考えるうえで欠かせない資料であることから、重要文化財に指定されている。

## 2. 調査位置

### （1）洲崎館跡

調査区は、過年度の調査で洲崎館跡の主郭と想定された砂館神社西側の平坦地に第 1 調査区、空堀・土塁が想定された砂館神社北西側において第 2 調査区を設定している。城館に係る防御遺構及び建物跡等の検出を目的とした遺構確認調査を実施している。

### （2）勝山館跡

調査区は、主郭より西側に位置する標高約 80m の西郭に位置する鶴の池周辺で実施している。鶴の池から延びる沢筋に第 1 調査区、過年度調査で礎石建物跡が想定された箇所に第 2 調査区で遺構確認調査を実施している。

## 3. 調査方法

グリッドは、史跡指定地内外を網羅するように設定をしている。グリッドは大グリッドで 20m×20m とし、東から西へ A、B、C…、北から南へ 1、2、3…とした。大グリッドは、4m×4m の小グリッドを設定して左上より右下へ 1～25 に細分している。グリッドの表記は、大グリッドと小グリッドを組み合わせて、16P3、8K25 などとしている。

遺構の調査方法は、中世では平面プランを確認し、溝についてトレンチを設定してトレンチ内を完掘、柱穴について段下げ・半截、土壙について半截をして行った。近世以降の遺構に関しては、原則として中世の場合と同様であるが、その下位の中世の包含層及び遺構を確認することが困難な場合のみ完掘を行っている。

遺構の実測は、全体の平面図・セクション図について、1/20、1/40 の縮尺を用いた。遺構番号は、検出された順に遺構の種類別で番号を付した。遺物の取り上げは、近現代以降（I 層）のものについて

グリッド・層位ごとに取り上げた。

中世包含層（Ⅲ層）・近世包含層（Ⅱ層）・遺構から出土した遺物については、出土地点、標高値を記録し、層位ごとに取り上げを行なった。

#### 4. 調査体制

##### 調査指導

史跡上之国館跡整備検討委員会

委員長 白杵 勲 札幌学院大学人文学部

副委員長 田才 雅彦 文化財サポート

委員 岩田 靖 上ノ国観光ガイド協会

久保 智康 叢山学院

小岩 直人 弘前大学教育学部

小林 和貴 東北大学植物園

箱崎 和久 奈良文化財研究所

オブザーバー 岩井 浩介 文化庁資源活用課

内田 和典 北海道教育庁生涯学習推進局 文化財博物館課

飛鳥 仁 上ノ国町役場 施設課土木建築グループ

八木橋 武 上ノ国町役場 施設課土木建築グループ

##### 調査協力

札幌学院大学人文学部（札幌市）

教授 白杵 勲

講師 大塚 宜明

学生 勝田 一氣、平川 光一

##### 調査主体者

上ノ国町教育委員会 教育長 矢代 智樹

主管 上ノ国町教育委員会事務局 局長 片石 明

##### 文化財グループ

主幹 塚田 直哉（担当者）

主査 熊谷 友良

学芸員 佐藤 貢平（調査員）

作業員 小澤 撫未、川口 泰子、鈴木 千春、田畠 恵、目黒 加奈子

#### 5. 調査経過

##### （1）洲崎館跡

7月 保安林内の発掘調査許可申請やトイレ等の手配を行い、機材等の準備を行った。

8月 調査機材を搬入して第1・2調査区の人力で草刈りや表土剥ぎを行った。

9月 連携協定を結んでいる札幌学院大学（学生1名）が考古学実習で来訪し9月5～9日まで調査を行う。第2調査区の掘削を行い、谷地形の最深部からKo-d火山灰の堆積を検出。

10月 第1・2調査区の掘削を行う。第2調査区では、Ko-d火山灰下から空堀状遺構を検出した。第1調査区北側にKo-d火山灰が堆積していることを確認した。調査区南側では柱穴を5基検出した。

11月 第1調査区南側の砂堆積層が厚いことから、今年度調査をKo-d火山灰上層までとした。第1・2調査区のセクション図、完掘平面図を作成した後、第1・2調査区の埋め戻しを行って調査を終

了し、機材の撤収を行った。

## (2) 勝山館跡

- 4月 調査区周辺の草刈り及び枝葉の除去を行った。
- 5月 機材等の運搬を行い、第1・2調査区の設定を行った。第1-1・1-2・2調査区を人力で表土剥ぎを行い、第2調査区はII層面を検出した。過年度調査で検出した礎石列に続く礎石を確認した。
- 6月 第1-3調査区の表土剥ぎを行い、第1調査区では集石を確認した。集石の間から縄文土器や石器が出土している。第2調査区は、セクション図、完掘平面図を作成した。
- 7月 第1調査区のセクション図、完掘平面図を作成した後、第1・2調査区の埋め戻しを行って調査を終了した。

## 6. 基本層序

### (1) 洲崎館跡

- I 層：近現代に相当する堆積層である。
- II 層：近世に相当する堆積層である。下部には、1640年降灰の Ko-d（駒ヶ岳 d）火山灰の層を含む。
- IIa 層：黒褐色及び暗褐色の腐植土層で、1640年降灰の Ko-d（駒ヶ岳 d）火山灰の上層に位置する。
- IIb 層：黒褐色及び暗褐色の腐植土層で、1640年降灰の Ko-d（駒ヶ岳 d）火山灰の下層に位置する。
- III 層：中世（15世紀中頃～16世紀）に相当する堆積層である。
- IIIa 層：飛砂による砂の堆積がみられる層である。
- IIIb 層：IIIa 層の下に堆積する砂質土層で中世の遺物包含層である。
- IV 層：縄文～擦文時代に相当する堆積層で、3層に細分される。
- IVa 層：黒色の腐植土層で、擦文時代に相当する層である。10世紀中葉に降灰の B-Tm（白頭山一苦小牧）火山灰層の上部に堆積する。
- IVb 層：10世紀中葉に降灰の B-Tm（白頭山一苦小牧）火山灰層の下部に堆積する黒色の腐植土層で、擦文～縄文時代に相当する層である。
- V 層：無遺物の砂層である。

### (2) 勝山館跡

- I 層：近現代に相当する堆積層である。
- II 層：近世に相当する堆積層である。下部には 1640 年代降灰の Ko-d（駒ヶ岳 d）火山灰の層を含む。勝山館跡の発掘調査では、この火山灰層を境として上層を近世面、下層を中世面と認識している。
- III 層：中世（15世紀中頃～16世紀）に相当する整地層である。
- IV 層：縄文～擦文時代に相当する堆積層で、3層に細分される。
- IVa 層：黒色の腐植土層で、擦文時代に相当する層である。
- IVb 層：IVa 層の下層に堆積する 10 世紀中葉に降灰の B-Tm（白頭山一苦小牧）火山灰層である。
- IVc 層：IVb 層の下層に堆積する黒色の腐植土層で、縄文時代に相当する層である。
- V 層：無遺物層で 2 層に細分される。
- Va 層：ソフトローム層である。
- Vb 層：ハードローム層である。
- VI 層：無遺物層で礫及び礫粒を多量に含む岩盤層である。

## 7. 洲崎館跡の遺構確認調査

### 第1調査区（第8図、PL 1・2）

[立地] 砂館神社西側の標高約12m前後の砂丘平坦地にあたる14L7～9・11～14・16～19・21～23グリッドに10m×13m+10m×7mの調査区を設定している。第1調査区周辺では、平成12年度に行った詳細分布調査の第20～30調査区において、15世紀代の青磁、白磁、茶臼、珠洲擂鉢、骨角器（中柄）が出土している。しかしながら、中世の遺構が確認できていないため、今年度は面的な広がりを持つ調査区を設定し、建物遺構等の検出に努めた。

また、当該箇所は令和3年度に実施した発掘調査で、毘沙門天の懸仏が隣接する場所から出土した地点である。

[層位] 近現代に相当するIa層（5cm）、大正～昭和に相当する盛土Ib層（層厚30～80cm）、近世に相当するII層（層厚約20cm）が確認されている。調査では近現代の整地に係る盛土層が厚かったため、Ko-d火山灰層の上層まで掘削し、それより下位の中世面は次年度調査の予定とした。

[検出遺構] 昨年度検出した‘21Pit5～12、柱穴1～5を検出した。

[出土遺物] 青磁碗9点（B2類1点、D2類6点、不明2点）、鉄製品11点（鍋1点、鎌1点、和釘8点、不明刃物1点）、銅製品31点（銭30点、銅線1点）、肥前磁器碗3点（IV期）・皿1点（IV期）、不明磁器碗1点（V期）、瓦135点（釉薬瓦44点、燻し瓦91点）、越後産徳利1点が出土した。

また、出土遺物は1640年降下のKo-d火山灰の直上で、燻し瓦・寛永通寶などが一括して廃棄される状況が確認された。

### ‘21Pit5～12

令和3年度に検出した柱穴である。柱間寸法は、東西に100～120cm（3.3～4.0尺）、南北に100cm（3.3尺）である。下記の表は、昨年度調査の概要を示したものである。出土遺物からは、幕末以降の柱穴であることが想定される。

No.	グリッド	掘方規模(cm)			新旧関係	備考
		長軸	短軸	深さ		
Pit5	14L17	24	24	—	—	平面プランの検出
Pit6	14L17	24	24	—	—	平面プランの検出
Pit7	14L17	24	24	—	—	平面プランの検出
Pit8	14L16	24	24	—	—	掘方から祥符通寶1枚出土、平面プランの検出
Pit9	14L16	24	24	—	—	平面プランの検出
Pit10	14L17	24	24	—	—	平面プランの検出
Pit11	14L16	24	24	—	—	掘方から越後徳利1点、寛永通寶（3期）1点、平面プランの検出
Pit12	14L16	24	24	—	—	平面プランの検出

### 柱穴1～5

柱痕からナイロン袋片を検出していることから、現代の柱穴である。柱間寸法は南東から北西に180cm（6尺）である。昨年度検出した‘21Pit5～12とは柱間寸法や軸が異なるため、別の建物と考えられる。

No.	グリッド	掘方規模 (cm)			新旧関係	備考
		長軸	短軸	深さ		
柱穴 1	14L23	36	35	45.0	—	トレーナによる掘削
柱穴 2	14L23	32	32	38.5	—	平面プランの検出後、半截
柱穴 3	14L17・18	31	28	46.2	—	平面プランの検出後、半截
柱穴 4	14L17	34	33	51.3	—	平面プランの検出後、半截
柱穴 5	14L17	35	34	47.8	—	平面プランの検出後、半截

## 第2調査区（第9図、PL3・4）

[立地] 砂館神社北西側の標高約8～12m前後の砂丘平坦地にあたる13L3・8・13・18・23グリッドに2.5m×20mの調査区を設定している。第2調査区周辺では、平成12年度に行った分布調査で第31調査区が調査されているが、中世と思われる遺構は確認できていない。

また、第2調査区から東へ20mの地点で令和3年度に実施した第3調査区では、空堀状遺構が確認されている。

[層位] 近現代に相当するIa層(層厚10cm)、大正時代に相当する盛土Ib層(層厚10～55cm)、Ic層(層厚5～40cm)、近世に相当するII層(層厚10～35cm)、中世に相当するIII層(層厚10cm)、無遺物の地山層であるV層が堆積している。

[検出遺構] 空堀状遺構、柱穴6・7を検出した。

[出土遺物] 鉄製品3点(和釘2点、銭1点)、瓦14点(赤瓦1点、焼瓦12点、釉薬瓦1点)、自然遺物1点(炭化物)が出土した。第1調査区と同じく、Ko-d火山灰層の上位で瓦などが出している。

### 空堀状遺構

[位置] 13L3・8グリッドに位置する。

[形態・規模] 東西方向に延びており、底面幅は208cmを測る。令和3年度に検出した空堀状遺構と同様、掘削した箇所より下位で掘り込み等が確認できなかった。

[堆積土] Ko-d火山灰下の黒色土層が堆積している。

[新旧関係] なし

[出土遺物] なし

### 柱穴6・7

近世のII層を掘り込んでいることから、近現代の柱穴である。

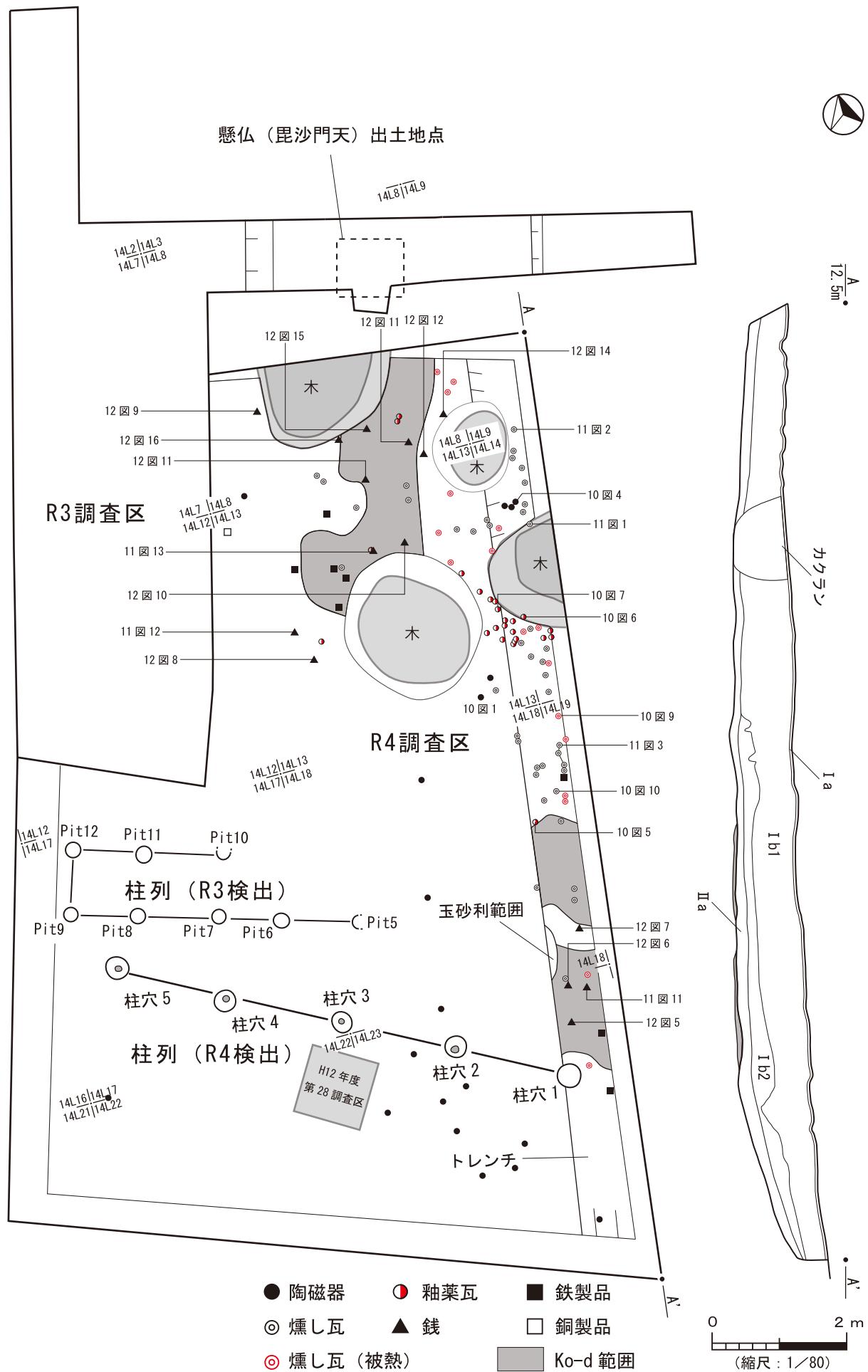
No.	グリッド	掘方規模 (cm)			新旧関係	備考
		長軸	短軸	深さ		
柱穴 6	13L8	24	22	45	—	平面プランの検出後、半截
柱穴 7	13L8	26	32	53	—	平面プランの検出後、半截

表2 第1調査区 南北東壁セクション(A～A') 土層観察表

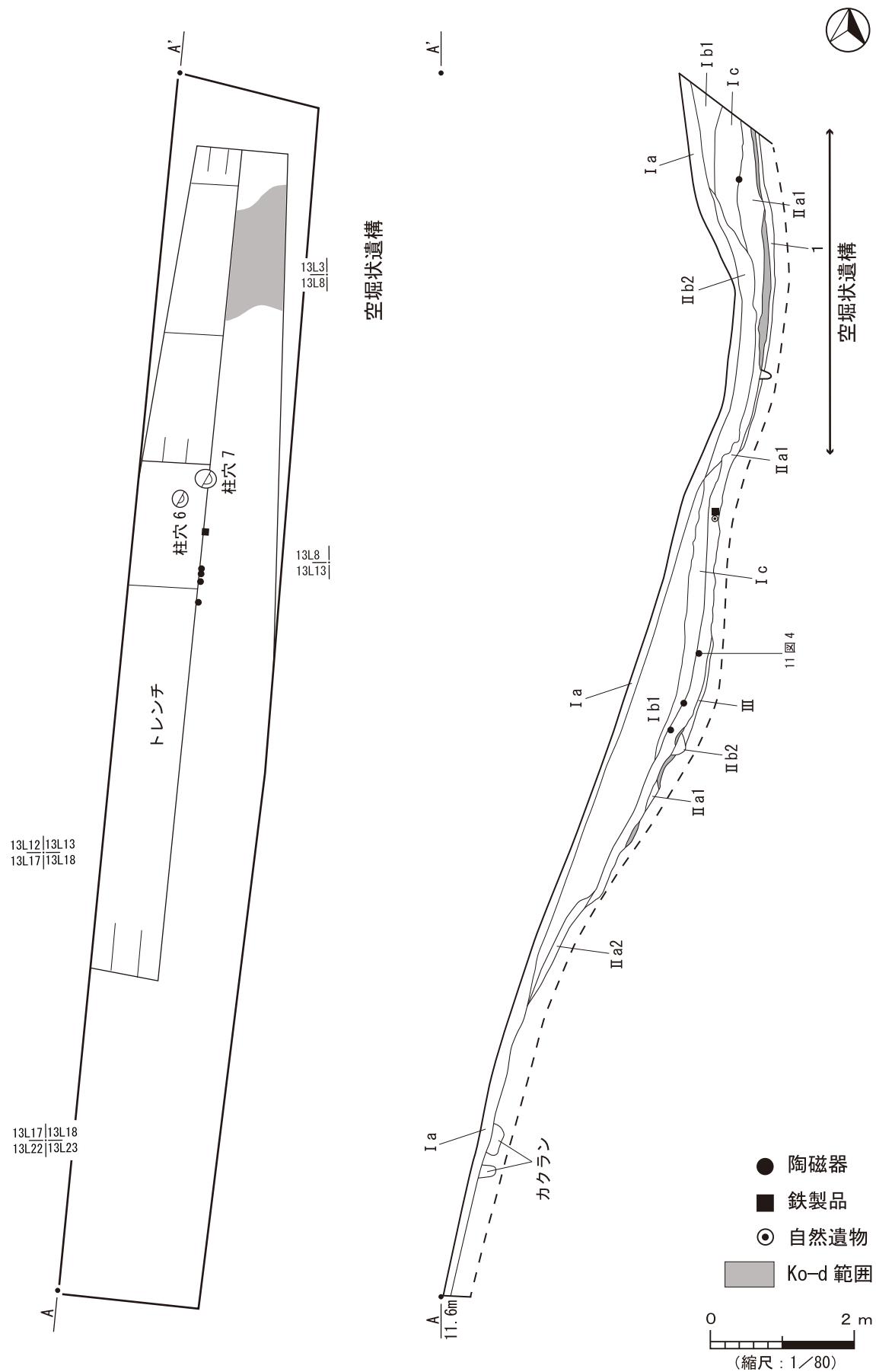
表土	I a	10YR3/2	黒褐色砂	ソフト	草根多量
整地層	I b1	10YR3/3	暗褐色砂	ハード	
	I b2	10YR4/2	灰黄褐色砂	ややハード	黒色土混り
	II a	10YR2/3	黒褐色シルト	ハード	

表3 第2調査区 南北西壁セクション(A～A') 土層観察表

表土	I a	10YR4/3	にぶい黄褐色砂	ややハード	草根多量
整地層	I b1	10YR2/2	黒褐色砂質土	ソフト	
	I b2	10YR3/4	暗褐色砂	ハード	
	I c	10YR5/3	にぶい黄褐色砂	ややハード	
II a1	II a1	10YR2/3	黒褐色砂質土	ふつう	
	II a2	10YR3/4	暗褐色砂	ソフト	
	II b	10YR2/2	黒褐色砂質土	ややハード	Ko-dブロック混入
III	III	10YR2/1	黒色砂質土	ふつう	
	V	10YR5/1	褐灰色砂	ソフト	



第8図 第1調査区 遺構平面図・セクション図・遺物分布図



第9図 第2調査区 遺構平面図・セクション図・遺物分布図

## 8. 洲崎館跡の出土遺物（10～12 図、PL11～13）

遺物は、中世及び近世の遺物が総計で 210 点出土している（表 4）。出土した層位は、近世及び近現代の堆積層となっている。

内訳は、中世陶磁器 9 点、近世陶磁器 6 点、鉄製品 14 点、銅製品 31 点、瓦 149 点、自然遺物 1 点である。調査区別では、第 1 調査区 193 点、第 2 調査区 17 点となり、第 1 調査区での出土が多い傾向にある。

### a. 陶磁器（10 図-1～4、PL11）

中世陶磁器は、青磁が第 1 調査区で確認されている。青磁（10 図-1～3、PL11-1～7）の器種は、碗が出土している。碗は、9 点（B2 類 1 点、D2 類 6 点、不明 2 点）が確認される。10 図-1 は、B2 類で箇描連弁文が施され、口縁形態が直口する。10 図-2・3 は、厚釉端反碗の D2 類である。

近世陶磁器（10 図-4、PL11-4）は、第 1 調査区から肥前系磁器IV期（18 世紀代）の碗 3 点・皿 1 点・V 期の碗 1 点の他、越後産徳利 1 点の計 6 点が出土している。

### b. 瓦（10 図-5～10・11 図-1～4、PL11-5～10・12-1～4）

瓦は、赤瓦 1 点、釉薬瓦 45 点、燻し瓦 103 点が出土している。赤瓦（11 図-4）としたものは、施釉をされているが光沢の少ないもの。釉薬瓦（10 図-5～7）としたものは厚く施釉され、光沢が多いものとして分類している。瓦は、第 1 調査区の砂館神社に近い東側で多くみられ、燻し瓦・赤瓦が Ko-d 火山灰上位の II 上砂層から大半が出土する。釉薬瓦は、カクラン層からの出土である。瓦の器種は、軒桟瓦、桟瓦、丸瓦等が確認される。10 図-5・6 は、釉薬瓦の軒桟瓦である。

また、10 図-6 は松前藩の家紋である丸に四つ目菱が施され、昭和 47 年まで砂館神社本殿に噴かれていた瓦と同様の形式と思われる。

10 図-8・9 は、菊花文状の刻印が施されている。10 図-10 は、「正改」と思われる刻印が施されている。赤瓦は、色調や胎土から能登系の産地が想定される。一方、釉薬瓦や燻し瓦の産地については、不明である。

### c. 鉄製品

器種は、和釘 10 点（角釘 9 点、平釘 1 点）、鎌 1 点、鍋 1 点、錢 1 点、不明刃物 1 点の 14 点が出土している。これらの多くは、第 1 調査区で確認され、Ko-d 火山灰直上の砂層で出土する。錢は、寛永通寶の一文錢（初鋸年 1739）が地表面で採集されている。

### d. 銅製品（11 図-5～12 図、PL12-5～16・13-1～17、表 5）

器種は、錢 30 点、銅線 1 点が出土している。これらは、すべて第 1 調査区の Ko-d 火山灰直上の砂層で確認され、砂館神社に近い調査区北東側で多く出土する。

錢は太平通寶（北宋、976 年）、裏文字「一錢」の洪武通寶（明、1368 年）、永樂通寶（明、1408 年）の他、寛永通寶 27 点（1 期 6 点、2 期 3 点、3 期 17 点、不明 1 点）が出土している。銅線は、瓦に使用されたものと思われる。

### e. 自然遺物

炭化物 1 点が出土している。

表4 洲崎館跡 出土遺物集計表

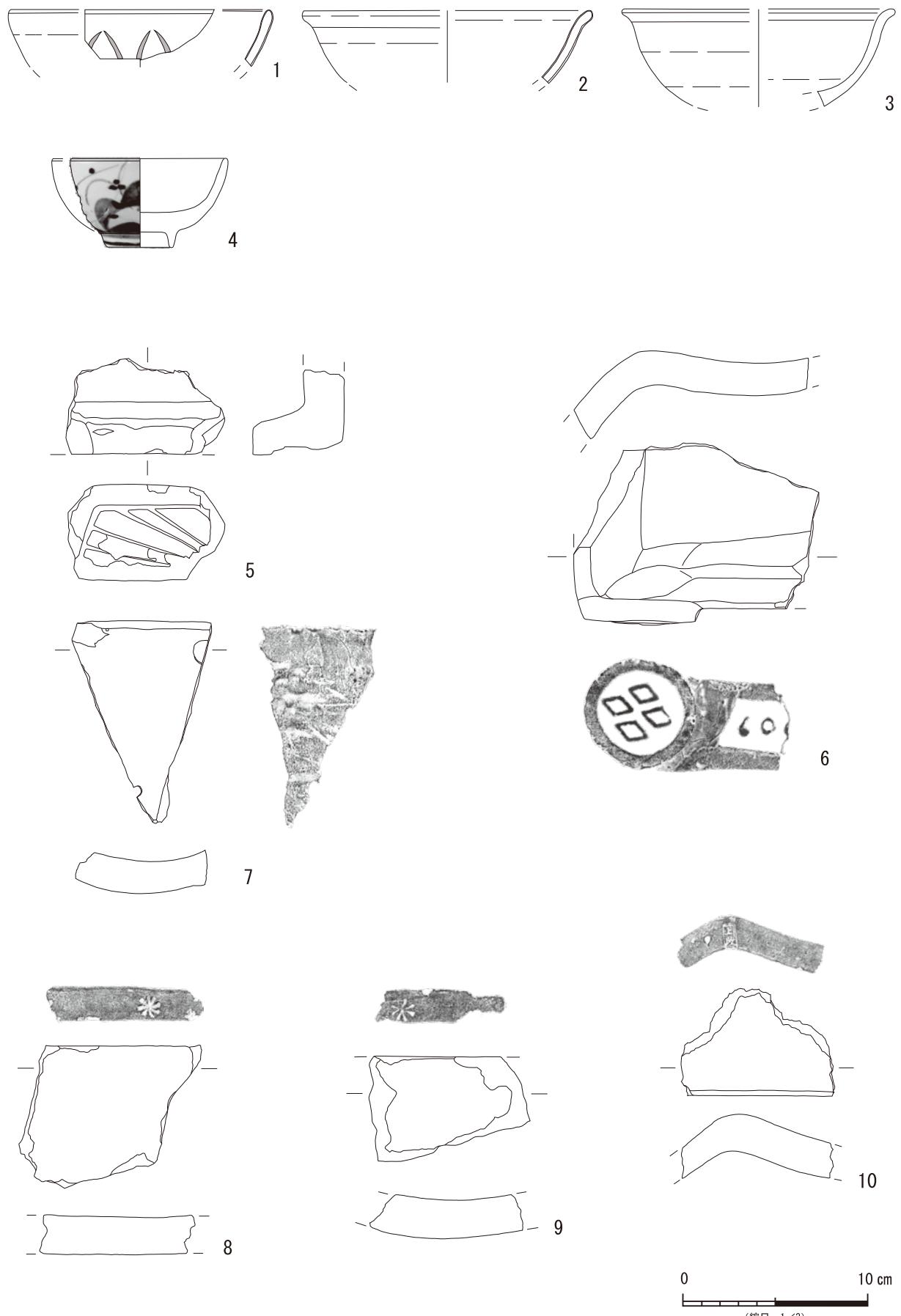
時期	種類	器種	破片数	被熱
洲崎館跡 (中世・近世・近現代)	中世陶磁器	舶載(青磁)	9	0
		国産	0	0
	小計		9	0
	近世陶磁器	IV期	4	0
		V期	2	0
	小計		7	0
	鉄製品	銭(内訳表5)	1	0
		鎌	1	0
		鍋	1	0
		不明刃物	1	0
		和釘	10	0
	小計		14	0
	銅製品	銭(内訳表5)	30	0
		銅線	1	0
	小計		31	0
	瓦	赤瓦	1	0
		釉薬瓦	45	2
		焼し瓦	103	28
	小計		149	0
	自然遺物	炭化物	1	0
	小計		1	0
合計		210	30	

表5 洲崎館跡 出土銭貨集計表

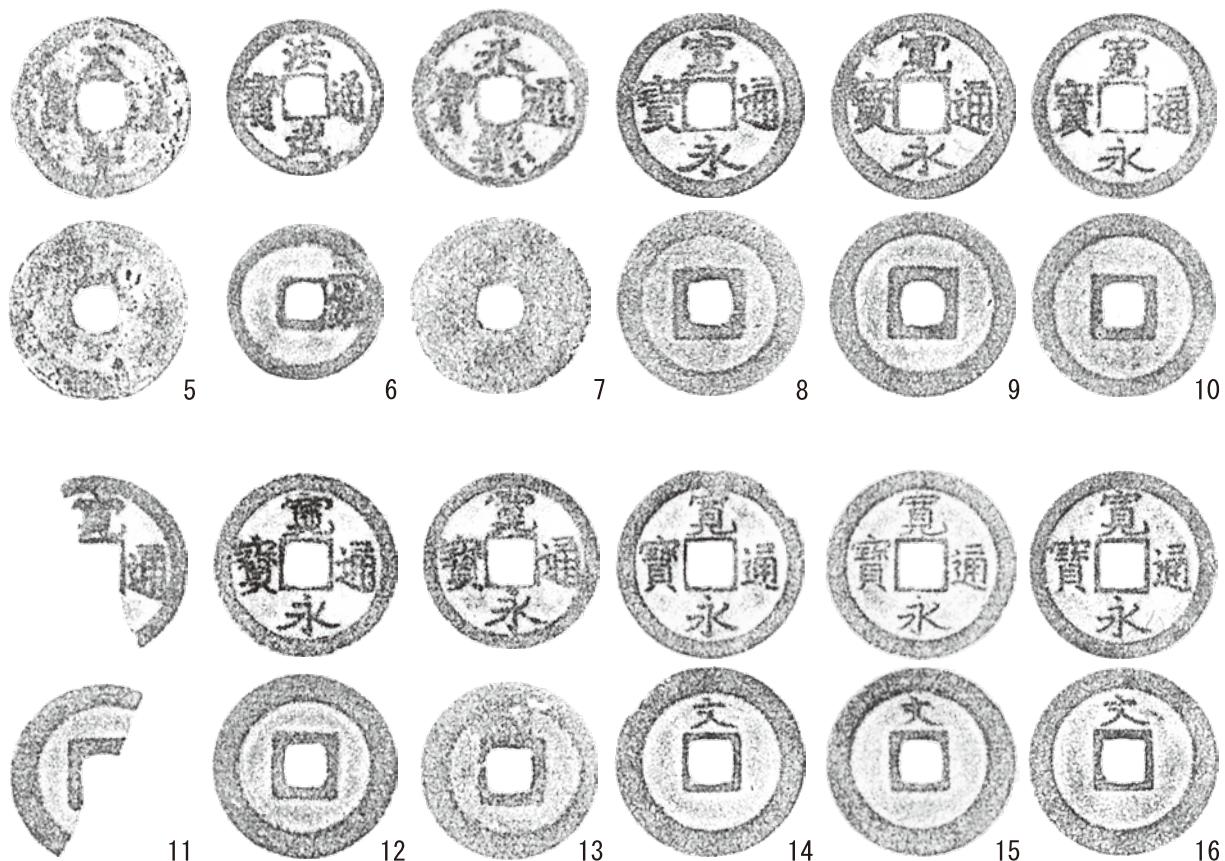
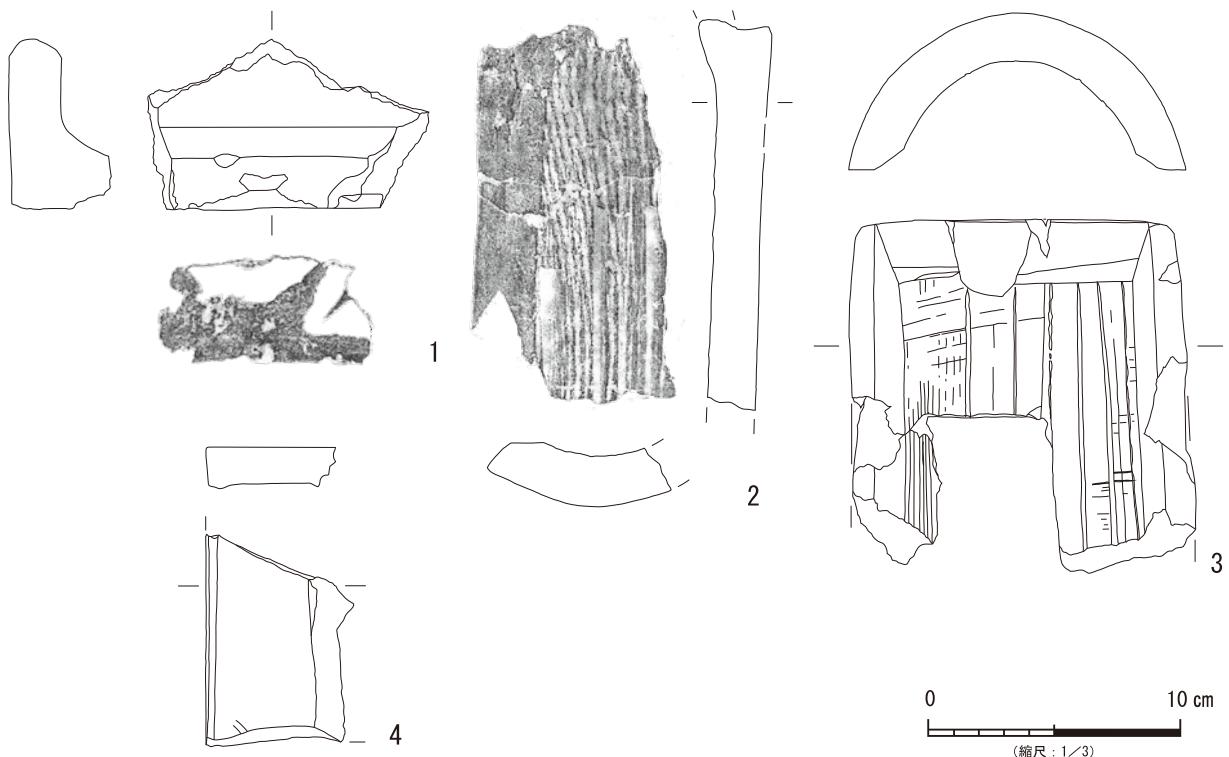
No.	銭名	初鑄年	破片数	被熱
1	太平通寶	北宋976年	1	0
2	洪武通寶	明1368年	1	0
3	永樂通寶	明1408年	1	0
4	寛永通寶	1期(1636年) 2期背文(1668年) 3期(1697年) 4期背足(1697年) 5期一文銭(1739年) 時期不明	6 3 16 1 1	0 0 0 0 0
合計		31	0	

表6 洲崎館跡 出土遺物観察表

図版No.	PLNo.	調査区	グリッド	遺構	層位	種類	器種	備考	整理No.
10図1	PL11-1	1	14L13		I	青磁	碗	直口碗 B2類 外面一胴部へラ描連弁 口径14.0cm	197
10図2	PL11-2	1		表採	青磁	碗	端反碗 D2類 口径15.6cm		1
10図3	PL11-3	1	14L22-23	II上砂	釉薬瓦	碗	端反碗 D2類 口径14.6cm		接1
10図4	PL11-4	1	14L14	II上砂	肥前系磁器	碗	直口碗 IV期 口径9.4cm 器高4.8cm 底径3.6cm		接2
10図5	PL11-5	1	14L18	カクラン	瓦	釉薬瓦	軒桟瓦 長さ(5.1)cm 幅(8.3)cm 厚さ2.2cm		67
10図6	PL11-6	1	14L14	カクラン	瓦	釉薬瓦	軒桟瓦(菱形) 長さ(9.8)cm 幅(12.7)cm 厚さ1.9cm		103
10図7	PL11-7	1	14L13	カクラン	瓦	釉薬瓦	丸瓦 長さ(11.0)cm 幅(7.4)cm 厚さ1.8cm		196①
10図8	PL11-8	1	14L22-23	II上砂	瓦	焼し瓦	棟瓦(菊文) 長さ(7.7)cm 幅(8.3)cm 厚さ2.1cm		50
10図9	PL11-9	1	14L19	II上砂	瓦	焼し瓦	棟瓦(菊文) 2次被熱 長さ(5.6)cm 幅(8.6cm) 厚さ2.1cm		83
10図10	PL11-10	1	14L18	II上砂	瓦	焼し瓦	棟瓦(刻印) 長さ(5.8)cm 幅(8.2)cm 厚さ2.1cm		68
11図1	PL12-1	1	14L14	II上砂	瓦	焼し瓦	軒桟瓦 長さ(6.7)cm 幅(11.1)cm 厚さ4.0cm		198
11図2	PL12-2	1	14L9	II上砂	瓦	焼し瓦	丸瓦 長さ(15.2)cm 幅(8.2)cm 厚さ2.1cm		接3
11図3	PL12-3	1	14L19	II上砂	瓦	焼し瓦	丸瓦 長さ(14.0)cm 幅(13.3)cm 厚さ2.0cm		接4
11図4	PL12-4	2	13L13		II	赤瓦	棟瓦 長さ(8.4)cm 幅(5.8)cm 厚さ1.7cm		20
11図5	PL12-5	1	14L22-23	II上砂	銅製品	銭	太平通寶 北宋976年 外径24.29mm×内径19.16mm×厚さ1.26mm 量目2.79g		25
11図6	PL12-6	1	14L22-23	'00埋め下	銅製品	銭	洪武通寶(背一錢) 明1368年 外径20.71mm×内径16.96mm×厚さ1.59mm 量目2.84g		42
11図7	PL12-7	1	14L22-23	II上砂	銅製品	銭	永樂通寶 明1408年 外径23.87mm×内径20.38mm×厚さ1.28mm 量目2.64g		142
11図8	PL12-8	1	14L22-23	II上砂	銅製品	銭	寛永通寶 1期1636年 外径25.06mm×内径19.64mm×厚さ1.18mm 量目3.14g		32
11図9	PL12-9	1	14L22-23	II上砂	銅製品	銭	寛永通寶 1期1636年 外径25.00mm×内径19.74mm×厚さ1.27mm 量目3.24g		38
11図10	PL12-10	1	14L22-23	II上砂	銅製品	銭	寛永通寶 1期1636年 外径24.68mm×内径19.63mm×厚さ1.14mm 量目2.35g		44
11図11	PL12-11	1	14L23	II上砂	銅製品	銭	寛永通寶 1期1636年 厚さ1.34mm 量目1.52g		58
11図12	PL12-12	1	14L13	II上砂	銅製品	銭	寛永通寶 1期1636年 外径24.69mm×内径19.05mm×厚さ1.35mm 量目3.24g		111
11図13	PL12-13	1	14L13	II上砂	銅製品	銭	寛永通寶 1期1636年 外径23.55mm×内径19.55mm×厚さ1.04mm 量目2.38g		127
11図14	PL12-14	1	14L13	II上砂	銅製品	銭	寛永通寶(背文) 2期1668年 外径25.51mm×内径19.73mm×厚さ1.26mm 量目2.68g		28
11図15	PL12-15	1	14L22-23	II上砂	銅製品	銭	寛永通寶(背文) 2期1668年 外径25.37mm×内径19.16mm×厚さ1.25mm 量目3.17g		37
11図16	PL12-16	1	14L22-23	II上砂	銅製品	銭	寛永通寶(背文) 2期1668年 外径25.24mm×内径19.81mm×厚さ1.28mm 量目3.30g		51
12図1	PL13-1	1		表採	銅製品	銭	寛永通寶 3期1697年 外径23.02mm×内径19.14mm×厚さ1.04mm 量目1.95g		2
12図2	PL13-2	1	14L22-23	II上砂	銅製品	銭	寛永通寶 3期1697年 外径23.69mm×内径18.45mm×厚さ1.11mm 量目1.99g		31
12図3	PL13-3	1	14L22-23	II上砂	銅製品	銭	寛永通寶 3期1697年 外径23.21mm×内径19.19mm×厚さ0.96mm 量目1.89g		33
12図4	PL13-4	1	14L22-23	II上砂	銅製品	銭	寛永通寶 3期1697年 外径22.09mm×内径17.84mm×厚さ0.93mm 量目1.50g		41
12図5	PL13-5	1	14L23	II上砂	銅製品	銭	寛永通寶 3期1697年 外径23.91mm×内径18.84mm×厚さ1.09mm 量目2.11g		57
12図6	PL13-6	1	14L23	II上砂	銅製品	銭	寛永通寶 3期1697年 外径22.16mm×内径19.18mm×厚さ1.03mm 量目2.16g		60
12図7	PL13-7	1	14L18	II上砂	銅製品	銭	寛永通寶 3期1697年 外径23.37mm×内径18.97mm×厚さ1.37mm 量目2.86g		62
12図8	PL13-8	1	14L13	II上砂	銅製品	銭	寛永通寶 3期1697年 外径22.72mm×内径18.36mm×厚さ0.87mm 量目1.76g		110
12図9	PL13-9	1	14L8	II上砂	銅製品	銭	寛永通寶 3期1697年 外径23.44mm×内径19.01mm×厚さ1.13mm 量目2.61g		119①②
12図10	PL13-10	1	14L13	II上砂	銅製品	銭	寛永通寶 3期1697年 外径24.64mm×内径19.80mm×厚さ1.30mm 量目3.29g		126
12図11	PL13-11	1	14L13	II上砂	銅製品	銭	寛永通寶 3期1697年 外径24.53mm×内径20.03mm×厚さ0.92mm 量目1.97g		129
12図12	PL13-12	1	14L8-13	II上砂	銅製品	銭	寛永通寶 3期1697年 外径23.83mm×内径19.24mm×厚さ1.25mm 量目2.52g		132
12図13	PL13-13	1	14L8	II上砂	銅製品	銭	寛永通寶 3期1697年 外径22.86mm×内径18.42mm×厚さ1.27mm 量目2.42g		133
12図14	PL13-14	1	14L8	II上砂	銅製品	銭	寛永通寶(背足) 3期1697年 外径23.06mm×内径17.99mm×厚さ0.98mm 量目1.98g		134
12図15	PL13-15	1	14L8	II上砂	銅製品	銭	寛永通寶 3期1697年 外径24.68mm×内径19.20mm×厚さ1.21mm 量目2.79g		136
12図16	PL13-16	1	14L8	II上砂	銅製品	銭	寛永通寶 3期1697年 外径24.51mm×内径19.47mm×厚さ0.99mm 量目2.63g		173
12図17	PL13-17	1		表採	銅製品	銭	寛永通寶 不明 外径24.02mm×厚さ1.09mm 量目2.16g		3

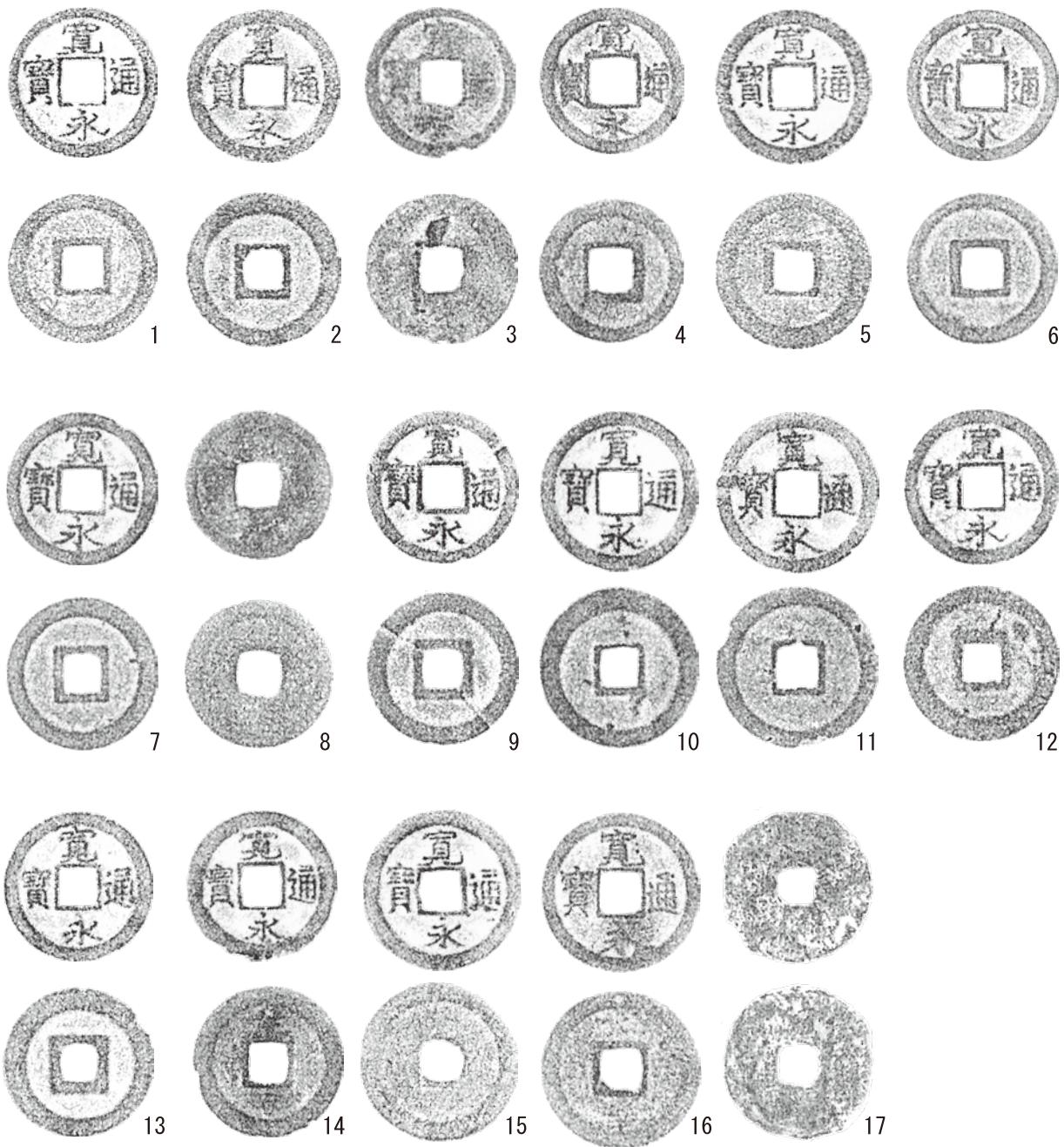


第10図 出土遺物（青磁・肥前磁器・瓦）



銅錢原寸大

第11図 出土遺物(瓦・銅錢)



原寸大

第12図 出土遺物(銅錢)

## 9. 勝山館跡の遺構確認調査

### 第1-1調査区（第13・14図、PL5～7）

〔立地〕鶴の池東側の標高約81m前後の沢状の窪地に位置する。19Pグリッドの沢状の窪地に直交する1m×8mの調査区を設定している。

〔層位〕近現代に相当する表土層のIa層（層厚約5cm）、耕作土層のIb層（層厚約25cm）、近世から近現代のII層（層厚1~25cm）、近世に相当するII層（層厚約10cm）、中世に相当するIII層（層厚5cm）縄文～擦文時代に相当するIV層（層厚5~15cm）が確認されている。II層はKo-d火山灰の2次堆積が確認され、近世から近現代に攪乱を受けている層位である。

縄文時代の堆積層であるIVc層を覆土とする沢状の窪地が確認され、IV層から集石を検出している。

〔検出遺構〕IV層で縄文時代の集石を検出した。

〔出土遺物〕縄文土器94点（前期16点、中期前半5点、後期初頭3点、時期不明70点）、剥片石器3点、自然石1点（水晶）が出土した。

#### 集石

〔位置〕19Pグリッドに位置する。

〔形態・規模〕トレンチ内で幅424cmの規模で検出される。

〔堆積土〕IV層で確認され、10~30cm大の礫が堆積している。礫は、地山層にもみられる凝灰岩が多く含まれている。縄文時代から沢状の地形を呈していたことが考えられ、その窪みに礫が堆積している。

〔新旧関係〕なし

〔出土遺物〕集石の礫の間から縄文土器23点（前期4点、時期不明19点）、剥片石器1点が出土した。

### 第1-2調査区（第13・14図、PL6～8）

〔立地〕鶴の池東側の標高約80mの沢状の窪地に位置する。19Pグリッドに2m×8mの調査区を設定している。掘削は、IV層及び地山面まで行っている。

〔層位〕近現代に相当する表土層のIa層（層厚約5cm）、耕作土層のIb層（層厚約10~25cm）、近世から近現代のII層（層厚15cm）、中世に相当するIII層（層厚10cm）縄文～擦文時代に相当するIV層（層厚10~20cm）が確認されている。その他、無遺物層のローム質の地山面であるV層、岩盤層のVI層が確認されている。

〔検出遺構〕Ko-d火山灰が覆土に堆積する沢状遺構を検出した。

〔出土遺物〕越後産徳利2点、縄文土器64点（前期3点、中期前半6点、後期初頭2点、後期前半3点、時期不明50点）、剥片石器3点が出土した。

#### 沢状遺構

〔位置〕19Pグリッドに位置する。

〔形態・規模〕溝状を呈し、幅224cm、深さ約12cmを測る。

〔堆積土〕礫を多く含む注記No.1、シルト質の黒褐色土の注記No.2・3が堆積している。Ko-d火山灰が覆土に見られ、溝状を呈するため、1640年以前の遺構と考えられた。土層堆積からは縄文時代に沢として窪みを呈していたが、中世の段階で掘削を行い、沢状の遺構としたことが考えられた。また、現段階で沢状遺構に伴う遺物が出土していないことから、利用方法については不明である。覆土は、Ko-d火山灰降下後の近世～近現代に堆積したものと思われる。

〔新旧関係〕なし

〔出土遺物〕縄文土器7点（中期前半1点、後期初頭1点、後期前半3点、時期不明2点）、剥片石器2点が出土した。

### 第1-3調査区（第13・14図、PL6・8）

〔立地〕鶴の池東側の標高約80mの沢状の窪地に位置する。19Pグリッドに6m×8.5mの調査区を設定

している。

[層位] 近現代に相当する表土層のIa層（層厚約5cm）、耕作土層のIb層（層厚約10~20cm）、近世に相当するII層（層厚約10~35cm）、中世に相当するIII層（層厚15cm）縄文～擦文時代に相当するIV層（層厚10~30cm）の他、無遺物の地山層のV層が確認されている。

[検出遺構] 風倒木跡、IV層で縄文時代の集石を検出した。

[出土遺物] 鉄製品1点（和釘）、越後産徳利1点、近現代磁器碗1点、縄文土器5点（前期1点、時期不明4点）、剥片石器2点が出土した。

### 集石

[位置] 19P グリッドに位置する。

[形態・規模] トレンチ内で幅243cmを測る。

[堆積土] IV層で確認され、10~30cm大の礫が堆積している。礫は、地山層にもみられる凝灰岩が多く含まれている。第1-1調査区と同様に、縄文時代から沢状の地形を呈していたことが考えられ、その窪みに礫が堆積している。

[新旧関係] なし

[出土遺物] 矿の間から縄文土器3点（前期1点、時期不明2点）が出土した。

### 第2調査区（第15図、PL9・10）

[立地] 鶴の池東側の標高約79mの西郭に位置する。18P グリッドに5.5m×3m+2.5×7mの調査区を設定している。第2-1・3調査区とした箇所は、今年度掘削した範囲である。第2-2調査区は令和3年度に調査した箇所で、今年度の礎石列との繋がりを確認するために掘削した範囲である。

[層位] 近現代に相当するIa層（5cm）、近世に相当するII層（層厚約15cm）、中世に相当するIII層（層厚5cm）、縄文～擦文時代に相当するIV層（層厚5cm）が確認されている。

[検出遺構] 土壙1、礎石建物跡の一部分と思われる礎石を確認している。

[出土遺物] 白磁皿1点（E類）、不明磁器瓶1点、近世陶器坏1点、瓦1点（釉薬瓦1点）、鉄製品10点（和釘9点、不明刃物1点）、縄文土器126点（前期1点、中期後半～末1点、後期初頭90点、後期前半1点、時期不明33点）、剥片石器3点が出土した。

### 土壙1

令和3年度に検出した土壙である。今年度は覆土上面にある礫を除去した際に土壙が確認されたため、半裁を行った。

[位置] 18P グリッドの礎石建物跡の南側に位置する。

[形態・規模] 平面形は調査区外へ延びるため不明であるが、確認した範囲で長軸（140）cm、短軸136cm、深さ40cmを測る。

[堆積土] 大型の礫などが覆土中に混入し、人為的な堆積と思われる。

[新旧関係] なし

[出土遺物] 覆土から鉄製品2点（和釘）、縄文土器1点（時期不明）が出土している。

### 礎石建物跡

[位置] 18P のグリッドに位置する。

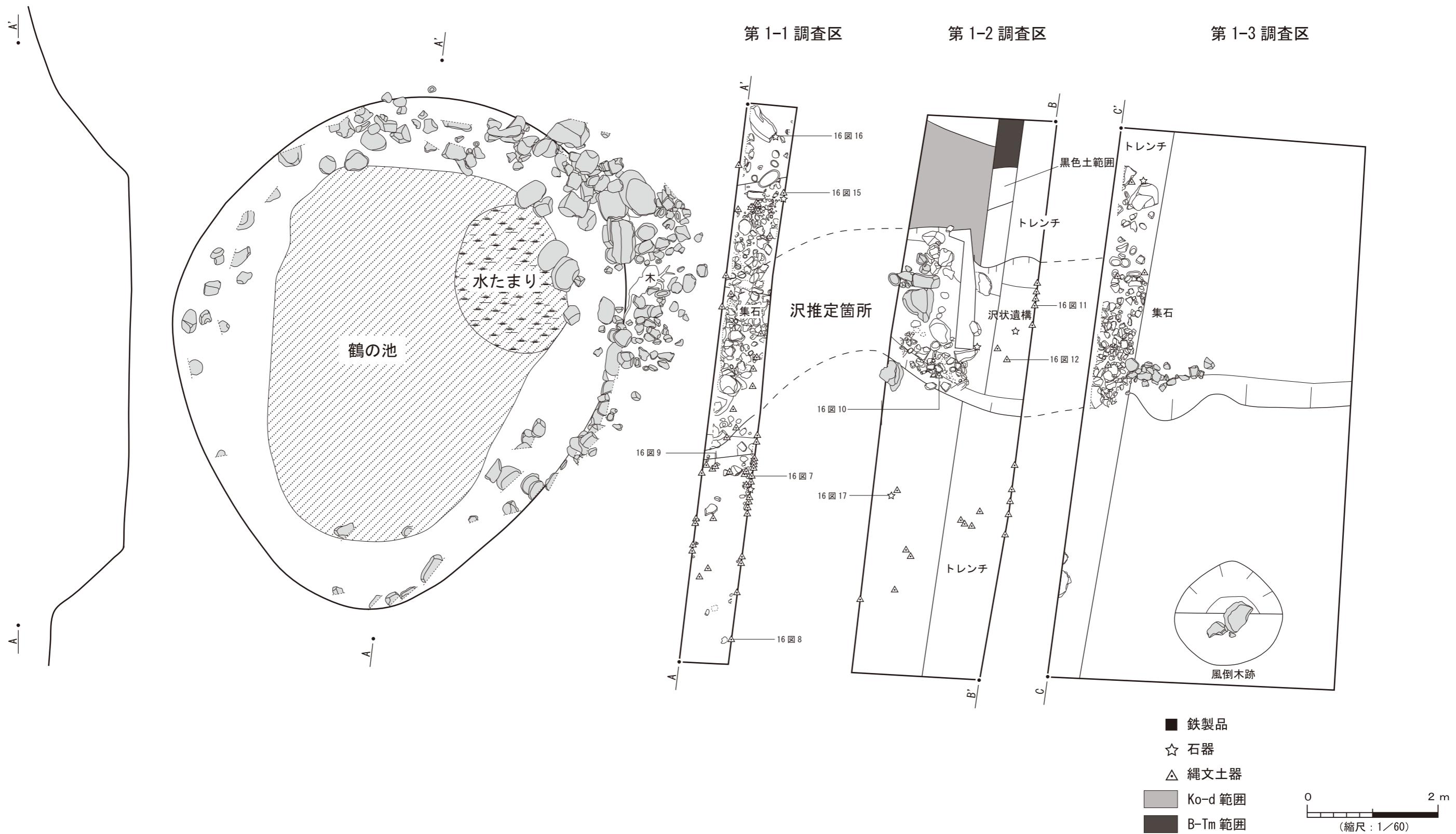
[形態・規模] 第2-1調査区では礎石を4基（礎石3～6）検出した。これらは、第2-2調査区で令和3年度の調査で検出した礎石1・2と一連のものと考えられる。礎石2・3・5・6で、柱間寸法約5.6尺（170cm）の1間四方を呈するが、建物としての平面形を確認することができなかった。

礎石3～5では、周辺から据付時の掘方範囲を確認している。また、礎石5及び礎石6の間で礎石が確認できなかつたが、礎石の掘方範囲と思われる黒色土範囲を検出した。

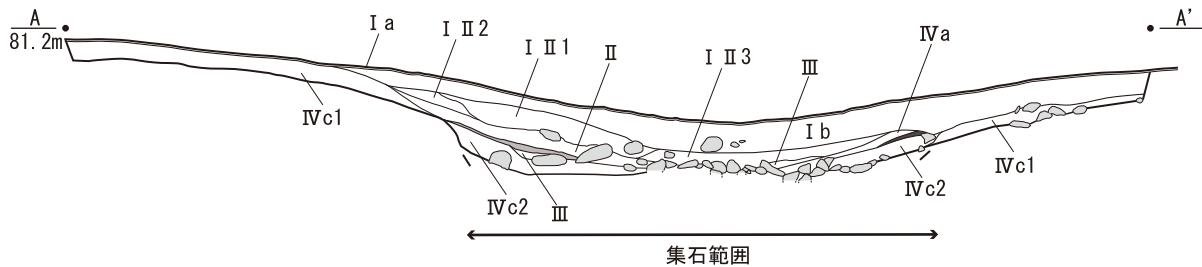
[堆積土] 礎石下位に1640年降下のKo-d火山灰が堆積しないため、それ以前の設置が考えられる。

[新旧関係] なし

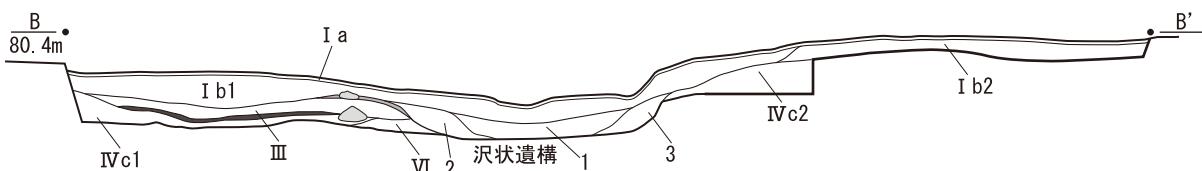
[出土遺物] なし



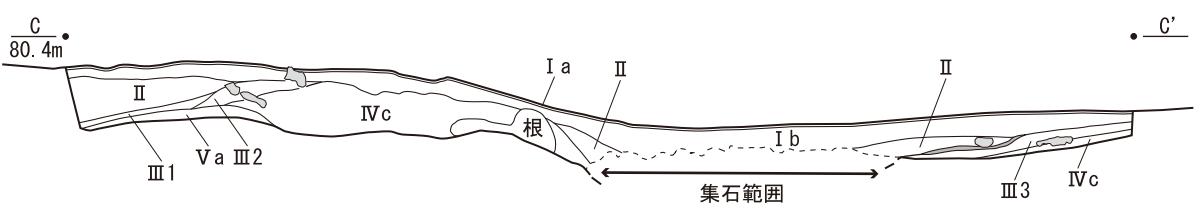
第13図 鶴の池・第1調査区  
遺構平面図・遺物分布図



第1-1南北西壁セクション



第1-2南北東壁セクション



第1-3南北西壁セクション

Ko-d 範囲
B-Tm 範囲
礫

0 2 m  
(縮尺: 1/60)

第14図 第1調査区 セクション図

表7 第1-1調査区 南北西壁セクション(A~A') 土層観察表

表土	I a	10YR3/2	黒褐色シルト	ソフト	草根多量
	I b	10YR3/3	暗褐色シルト	ややハード	
I II 1	10YR3/3	暗褐色シルト	ややソフト	Ko-dブロック、黒色土多量混入	
I II 2	10YR3/3	暗褐色シルト	ややソフト	Ko-dブロック、黒色土少量混入	
I II 3	10YR3/2	黒褐色シルト	ややハード	Ko-d微量混入	
II	10YR3/4	暗褐色シルト	ややハード	Ko-dブロック混入	
III	10YR3/3	暗褐色シルト	ややソフト		
II b	10YR2/1	黒色シルト	ややハード		
III 1	10YR3/2	暗褐色シルト	ややハード		
IVc1	7.5YR5/3	にぶい褐色シルト	ややハード	赤褐色礫混入	
IVc2	7.5YR5/3	にぶい褐色シルト	ややソフト	赤褐色礫混入	

表8 第1-2調査区 南北東壁セクション(B~B') 土層観察表

表土	I a	10YR3/3	暗褐色シルト	ソフト	草根多量
	I b1	10YR3/3	暗褐色シルト	ややソフト	
	I b2	10YR3/3	暗褐色シルト	ややハード	
沢状遺構	1	10YR3/4	暗褐色シルト	ややハード	礫多量
	2	10YR2/3	黒褐色シルト	ややソフト	
	3	10YR2/3	黒褐色シルト	ややソフト	
	III	10YR2/2	黒褐色シルト	ややソフト	
	IVc1	10YR2/2	黒褐色シルト	ややソフト	礫多量
	IVc2	10YR4/4	褐色シルト	ややハード	
	VI	5YR3/4	暗赤褐色シルト	ハード	

表9 第1-3調査区 南北西壁セクション(C~C') 土層観察表

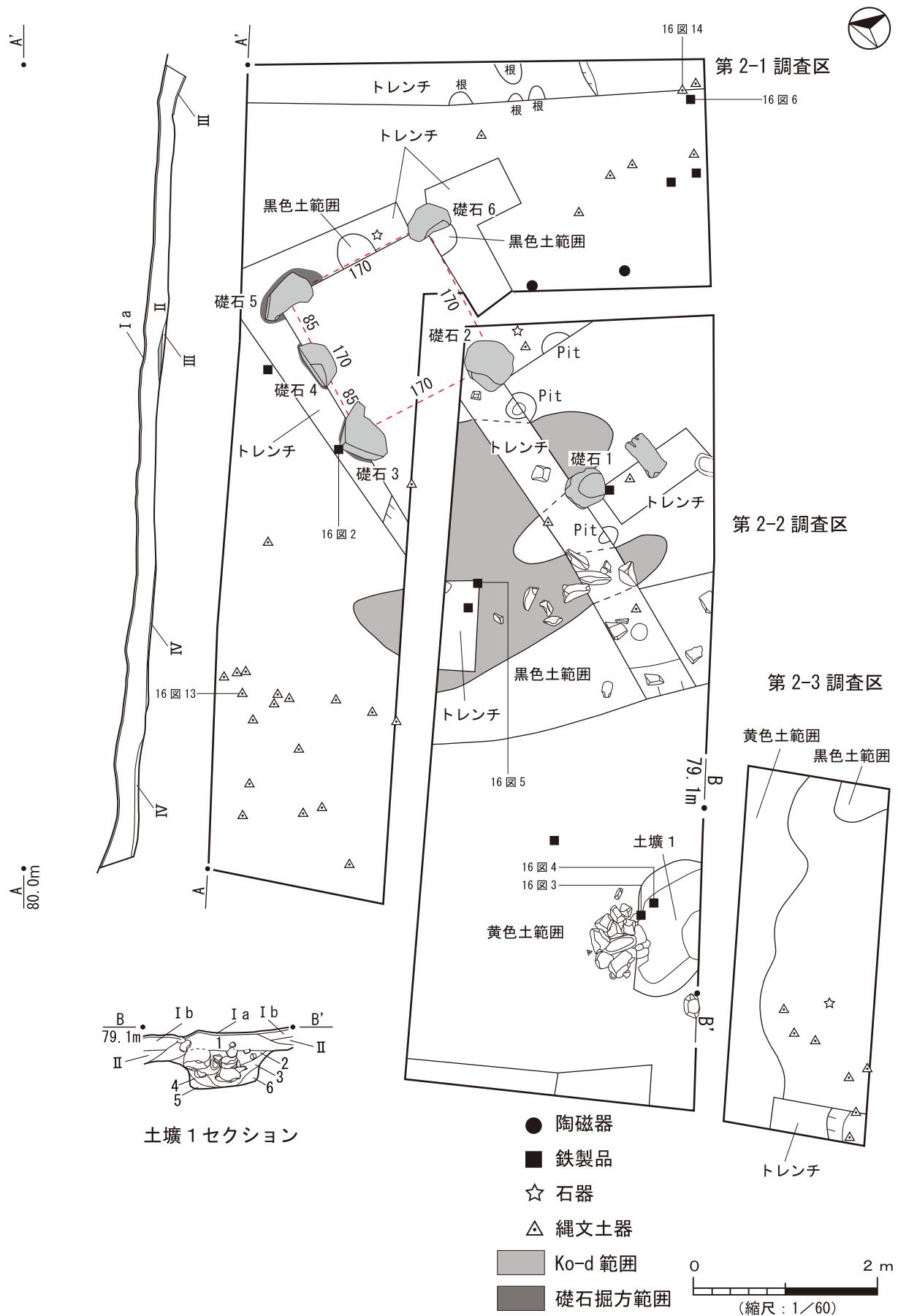
表土	I a	10YR2/2	黒褐色シルト	ソフト	草根多量
	I b	10YR2/2	黒褐色シルト	ややソフト	
	II	10YR2/3	黒褐色シルト	ややハード	
	III 1	10YR2/2	黒褐色シルト	ややハード	
	III 2	10YR2/1	黒色シルト	ややソフト	
	III 3	10YR2/1	黒色シルト	ソフト	
	IVc	10YR4/4	褐色シルト	ややハード	礫混入
	Va	10YR4/6	褐色シルト	ややハード	

表10 第2調査区 東西北壁セクション(A~A') 土層観察表

表土	I a	10YR3/2	黒褐色シルト	ソフト	草根多量
	I b	10YR3/2	黒褐色シルト	ややハード	
	II	10YR8/3	浅黄橙ローム	ハード	
	IV	10YR5/0	黄褐色シルト	ややハード	

表11 第2調査区 土壌1セクション(B~B') 土層観察表

土壤1	I a	10YR2/3	黒褐色シルト	ソフト	草根多量
	I b	10YR2/3	黒褐色シルト	ややソフト	
	II	10YR3/2	黒褐色シルト	ややハード	
	1	10YR3/2	黒褐色シルト	ややソフト	
	2	10YR3/3	暗褐色シルト	ややソフト	
	3	10YR3/3	暗褐色シルト	ややソフト	褐色土混入
	4	10YR2/3	黒褐色シルト	ややソフト	褐色土混入
	5	10YR4/4	褐色シルト	ややハード	暗褐色土混入
	6	10YR4/4	褐色シルト	ハード	暗褐色土混入



第15図 第2調査区 遺構平面図・セクション図・遺物分布図

## 10. 勝山館跡の出土遺物（16図、PL14～16）

遺物は、縄文、中世、近世及び近現代の遺物が総計で320点出土している（表12）。内訳は、縄文土器289点、石器12点、中世陶磁器1点（白磁皿1点）、近世陶器5点、鉄製品11点（和釘10点、刃物（柄）1点）、瓦1点、自然遺物1点である。また、第1調査区176点、第2調査区144点が出土している。

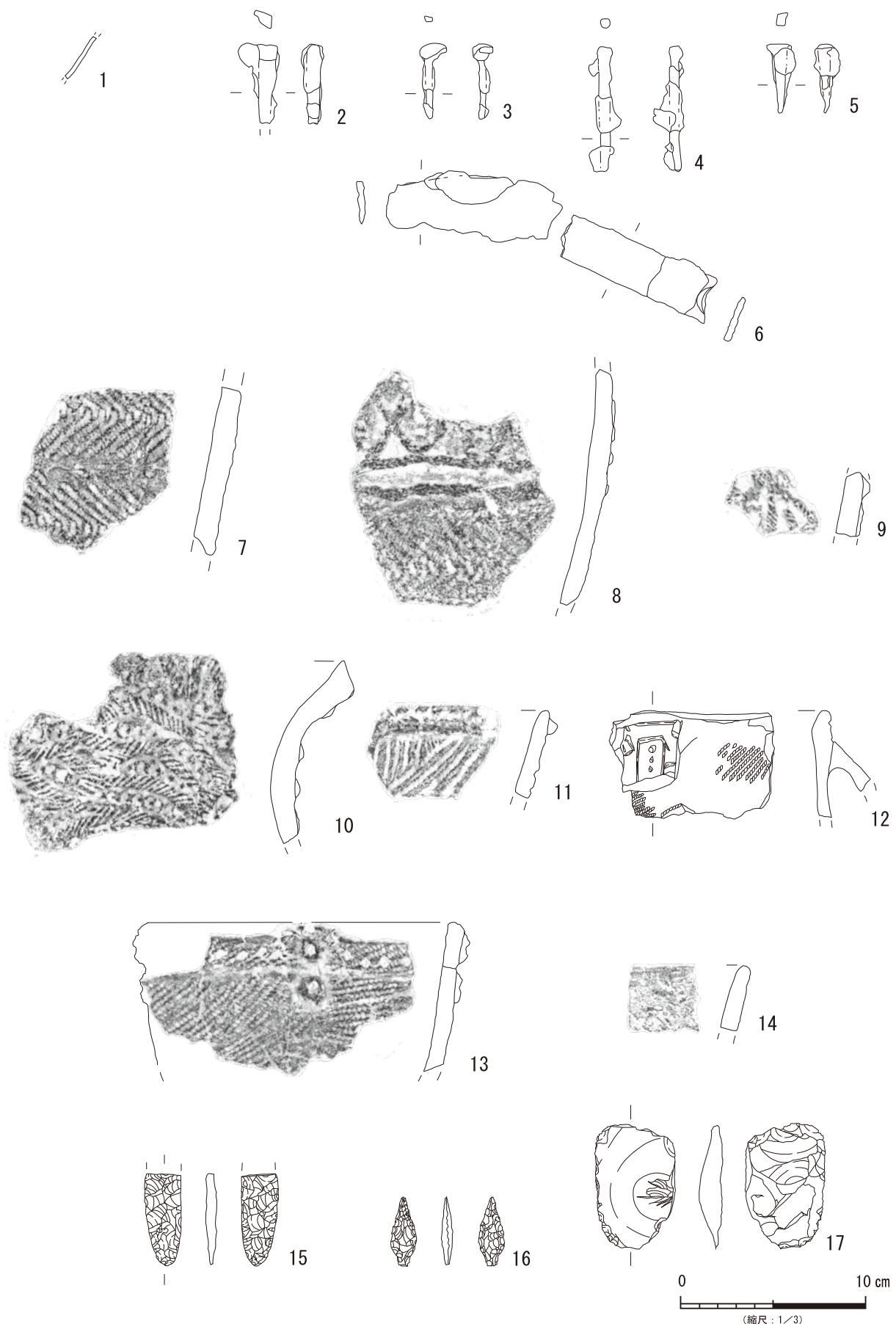
第1調査区では、縄文時代の集石から縄文土器・石器が確認されている。第2調査区では、中世の土壙1の覆土中から和釘（16図-3・4）が出土している。

表12 勝山館跡 出土遺物集計表

時期	種類	器種	破片数	被熱
勝山館跡 （縄文・中世・近世・近現代）	縄文土器	前期	21	0
		中期前半	11	0
		中期後半～末	1	0
		後期初頭	95	0
		後期前半	4	0
		不明	157	0
	石器	剥片石器	12	0
		小計	301	0
	中世陶磁器	舶載（白磁）	1	0
		国産（瀬戸・越前）	0	0
	近世陶器	小計	1	0
		IV期	0	0
		V期	5	0
	鉄製品	小計	5	0
		和釘	10	0
		不明刃物	1	0
	瓦	小計	11	0
		釉薬瓦	1	0
		小計	1	0
	自然石	水晶	1	0
		小計	1	0
合計			320	0

表13 勝山館跡 出土遺物観察表

図版No.	PLNo.	調査区	グリッド	遺構	層位	種類	器種	備考	整理No.
16図1	PL14-1	2	18P		'21埋め土	白磁	端反皿	E群	1
16図2	PL14-2	2-1	18P		II	鉄製品	和釘	長さ(41.46)mm 幅(12.6)mm 厚さ6.83mm 量目8.30g	111
16図3	PL14-3	2-2	18P	土壙1	覆土	鉄製品	和釘	長さ40.71mm 幅14.78mm 厚さ4.28mm 量目2.53g	118
16図4	PL14-4	2-2	18P	土壙1	覆土	鉄製品	和釘	長さ67.54mm 幅8.14mm 厚さ5.61mm 量目8.38g	119
16図5	PL14-5	2-2	18P		III	鉄製品	和釘	長さ36.41mm 幅13.19mm 厚さ6.28mm 量目3.56g	121
16図6	PL14-6	2-1	18P		I	鉄製品	不明刃物	長さ(93.34)mm 幅29.48mm 厚さ4.17mm 量目27.95g	4
16図6	PL14-6	2-2	18P		II	鉄製品	刃物の柄	長さ(85.2)mm 幅24.2mm 厚さ3.2mm 量目24.67g	'21-1
16図7	PL14-7	1-1	19P		IV	縄文土器	深鉢	縄文時代前期	57
16図8	PL15-1	1-1	19P		IV	縄文土器	深鉢	縄文時代中期前半	89
16図9	PL15-2	1-1	19P		IV	縄文土器	深鉢	縄文時代中期前半 円筒上層式	63③
16図10	PL15-3	1-2	19P		I	縄文土器	深鉢	縄文時代中期前半 円筒上層式	30
16図11	PL15-4	1-2	19P		IV	縄文土器	深鉢	縄文時代後期初頭	145
16図12	PL15-5	1-2	19P		IV	縄文土器	鉢	縄文時代後期前半 大津式併行	接1
16図13	PL16-1	2-1	18P		IV	縄文土器	深鉢	縄文時代後期初頭 涌元式1・2併行	接21
16図14	PL16-2	2-1	18P		II	縄文土器	鉢	縄文時代後期前半	116
16図15	PL16-3	1-1	19P		IV	剥片石器	石槍	長さ(50)mm 幅20mm 厚さ5.5mm 量目6.42g	85
16図16	PL16-4	1-1	19P		IV	剥片石器	石鎌	長さ37mm 幅14mm 厚さ6mm 量目2.51g	88
16図17	PL16-5	1-2	19P		II	剥片石器	スクレイバー	長さ67mm 幅43mm 厚さ12.5mm 量目39.14g	153



第16図 出土遺物（陶磁器・鉄製品・縄文土器・石器）

### III まとめ

#### 1. 洲崎館跡の調査成果

今年度は、砂館神社西側の主郭と考えられている平坦面と砂館神社北側の空堀が想定される谷地形となっている箇所に調査区を設定し、建物遺構や城館に伴う防御遺構の検出を目的に調査を行った。

##### (1) 主郭

第1調査区は、中近世の建物遺構の検出を目的として設定したが、盛土が1m前後と想定したよりも厚く、近世上面までの掘削に留めたため、洲崎館跡に関連する遺構を確認することができなかった。調査の結果、第1調査区周辺の平坦地は近現代に盛土によって造成された平坦面であることが判明した。

出土遺物では、瓦が調査区の神社寄りの箇所で多くみられたため、砂館神社もしくは前身にあたる毘沙門堂や拝殿のものと考えられた。現在、砂館神社本殿は銅板葺であるが、昭和47年まで丸に四つ目菱の桟瓦葺であった。釉薬瓦のうち丸に四つ目菱の軒桟瓦は、昭和47年に本殿に葺かれていた瓦と思われる（写真：右・下）。

これ以前に瓦を葺いた時期は、安永7年（1778）の火災で本殿・拝殿とともに焼失し、再建後の安永9年（1780）のご神体勧請の際の棟札に「瓦師」の名が記され、火事の焼失後に瓦を葺いたことが推測される（町史編集委員の坪田芳典氏のご教示を得た）。その他、文政8年（1825）の本殿と拝殿を修理した際の棟札に瓦師の名前がみえるため、当該期にも瓦を葺いたことが考えられる。



銅板葺前の桟瓦葺の砂館神社本殿

（昭和47年撮影）



砂館神社本殿の丸に四つ目菱の軒桟瓦（昭和47年撮影）

また、安永8年以降の建物の大まかな造営の記録は、以下の通りである（表14）。今回出土した、煙し瓦、赤瓦、釉薬瓦が神社造営のどの段階に当たるかは、今後の調査成果を踏まえて後考したい。

表14 安永年間以降における砂館神社のおもな造営記録

No.	和暦	西暦	内容	備考
1	安永8	1779	『奉建立毘沙門天王本殿一字成就所』（表面拔粹）	棟札
2	安永9	1780	『奉御屋称瓦干作諸願成就祈歎』（裏面拔粹）	棟札、同面に「瓦師」と記載
3	寛政12	1800	『奉修覆毘沙門天王本社一字』（表面拔粹）	棟札
4	文政8	1825	『奉修覆毘沙門天王本殿拝殿一字成就所』（表面拔粹）	棟札、同面に「瓦師」2名の名前が記載
5	天保12	1842	『奉修覆毘沙門天王本殿一字成就所』（表面拔粹）	棟札
6	文久2	1862	『奉建立毘沙門天王拝殿壱字成就之攸』（表面拔粹）	棟札
7	昭和47	1972	丸に四つ目菱の桟瓦葺から銅板葺へ変更	

## (2) 空堀・土塁

第2調査区では、令和3年度に確認した第3調査区から延長する空堀状遺構を検出した。空堀状遺構とした箇所では、Ko-d 火山灰下のレンズ状に堆積する黒色土、さらに下位の砂層まで掘削したが、空堀の掘り込みを確認することができなかった。

また、周辺に空堀の掘上げ土の堆積も確認できなかつたため、自然の谷地形を空堀として利用し、曲輪を区画していた可能性が考えられた。

## 2. 勝山館跡の調査成果

今年度は、鶴の池から沢状に延びる窪地と令和3年度調査において、礎石が確認された平坦地で遺構確認調査を行つた。

勝山館跡の礎石建物跡は、荒神堂跡周辺や夷王山墳墓群などの信仰に関わる箇所での検出が多い遺構であるため、今年度の調査においても信仰に係る遺構・遺物の検出が期待された。

### (1) 鶴の池周辺

第1調査区では、沢状の自然地形に縄文時代の集石遺構が第1調査区で確認された。調査では、時代毎の変遷として縄文時代以前に自然地形の沢が形成され、縄文時代に集石などによる利用が明らかとなつた。

一方、中世の段階においても第1-2調査区のKo-d 火山灰の堆積から窪地状に沢地形が残存していたことを確認することができた。

さらに、それより上位の近現代においては畑の耕作などの際、窪地部分へ礫を廃棄したものが地表面に露出したことが判明した。

第1調査区の出土遺物では、集石の礫の間から縄文土器・石器を確認できたが、集石遺構の性格が廃棄に伴うのか、もしくは信仰に由来するものなのかについて疑問が残つた。また、中世の遺物は出土しなかつたため、中世における沢の利用については不明であった。集石遺構の性格については、次年度以降の鶴の池の発掘調査などを踏まえて検討し、当該箇所の土地利用を明らかにしていきたい。

### (2) 矩石周辺

第2調査区では、土壌1や昨年度の矩石の続きと思われる 1640 年に駒ヶ岳から噴出した火山灰(Ko-d)層より古い矩石を検出した。しかしながら、明確な建物規模は調査区外へ延びるため、確認できなかつた。

土壌1は人為的に埋戻しを行つたため、土葬墓の可能性も推測されたが、覆土中から和釘を出土のみで副葬品を確認することができず、明確な性格について特定するに至つてない。

勝山館跡の矩石建物跡は、過年度の調査で約 200 軒検出される掘立柱建物跡と比較して、荒神堂跡、客殿周辺から石敷き矩石建物跡、夷王山墳墓群の配石遺構などとその軒数は圧倒的に少ない。また、石敷き矩石建物跡には矩石周辺に礫が敷き詰められ、配石遺構には玉砂利が敷かれていたが、今回の調査では矩石周辺に礫や砂利の分布について確認できていない。

現時点で信仰に関わる遺構として認識することができないが、次年度以降は矩石の広がり及び周辺の平坦面について確認を行い、鶴の池全体の遺構の把握に努めていきたい。



調査前(南から)



Ko-d火山灰出土状況(西から)



完掘状況 (西から)



Ko-d火山灰上層瓦・銅錢出土状況(西から)



柱穴5(現代)検出状況(北から)



柱穴 1 ~ 5 (近現代)検出状況(西から)



柱穴 5 (近現代)半截状況(南西から)



調査後(南から)



東壁土層堆積状況(A~A'、西から)



調査前(南から)



Ko-d火山灰上層瓦出土状況(東から)



空堀状遺構Ko-d火山灰検出状況(南東から)



空堀状遺構完掘状況(東から)



土層堆積状況(南から)



柱穴 6・7(近現代)検出状況(東から)



完掘状況(北から)



調査後(南から)



西壁土層堆積状況(A~A'、東から)



調査前(西から)



調査前礫堆積状況（東から）



鶴の池(西から)



鶴の池俯瞰(南西から)



1-1調査区作業風景(北から)



1-2 調査区Ko-d火山灰検出状況(北から)



1-3 調査区完掘(北から)



第1調査区全体完掘(東から)



1-2 調査区沢状遺構検出状況(西から)



調査後(西から)



1-2 調査区礫堆積状況(東から)



1-1 調査区完掘(北から)



1-1 調査区西壁土層堆積状況(A~A'、東から)



1-2 調査区東壁土層堆積状況(A~A'、西から)



1-3 調査区西壁土層堆積状況(A~A'、東から)



調査前(南西から)



第2-2調査区土壤1検出状況(北から)



第2-1・2調査区礎石建物跡検出状況(南東から)



完掘状況(西から)



調査後(西から)



第2-1・2調査区礎石検出状況(北東から)



第2-1・2調査区礎石建物跡検出状況(南から)



第2-2調査区土壤1和釘出土状況(南から)



北壁土層堆積状況(A~A'、南北から)











1



2



3



4

5



# 報告書抄録

ふりがな	しせきかみのくにたてあと						
書名	史跡上之国館跡IX						
副書名	令和4年度洲崎館跡・勝山館跡発掘調査事業報告書						
卷次	9						
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	塙田直哉 佐藤貢平						
編集機関	上ノ国町教育委員会						
所在地	〒049-0611 北海道檜山郡上ノ国町字大留100 Tel:0139-55-2230						
発行年月日	2023年3月28日						
ふりがな	ふりがな 所在地	コード	世界測地系		調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名		市町村	遺跡番号	北緯			
しせきかみのくにたてあと 史跡上之国館跡	013625	C-02-25	41°48'36.20"	140°07'03.87"	令和4年5月16日	400m <sup>2</sup>	町内遺跡 発掘調査 等事業
のうち すざき だて あと 洲崎館跡 かつやま だて あと 勝山館跡	かみ くに ちよう あざ きたむら ち ない 上ノ国町宇北村地内 かみ くに ちよう あざ かつやま ち ない 上ノ国町宇勝山地内	C-02-03	41°48'40.90"	140°06'02.77"	令和4年11月22日	250m <sup>2</sup> 150m <sup>2</sup>	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
しせきかみのくにたてあと 史跡上之国館跡	城館	中世	・洲崎館跡 空堀状遺構、柱穴等  ・勝山館跡 集石、沢状遺構、礎石建物跡	・洲崎館跡 中世陶磁器(青磁)、近世陶磁器、不明磁器、鉄製品(錢、鎌、鍋、不明刃物、和釘)、銅製品(錢、銅線)、瓦(赤瓦、釉薬瓦、焼し瓦)、自然遺物(炭化物)  ・勝山館跡 繩文土器・石器、中世陶磁器(白磁)、近世陶器、鉄製品(和釘、不明刃物)、瓦、自然石	・洲崎館跡 遺構確認調査により 検出された空堀状遺構、柱穴等の遺構と 出土遺物についての 報告。  ・勝山館跡 遺構確認調査により 検出された集石、沢 状遺構、礎石建物跡 の遺構と出土遺物に についての報告。		

---

## 史跡上ノ国館跡Ⅸ

— 令和4年度洲崎館跡・勝山館跡発掘調査事業報告書 —

発 行 上ノ国町教育委員会

北海道檜山郡上ノ国町字大留100

印 刷 令和5年3月17日

発 行 令和5年3月28日

印刷所 ハコ一印刷株式會社

---

